物語の向こう側

茅葉　こうこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
物語の向こう側

【Ｎコード】
Ｎ１３１７Ｏ

【作者名】
茅葉　こうこ

【あらすじ】
物語は、いつでも媒体の向こうだった。色鮮やかに描かれた文章や絵や、テレビ画面のその向こう。これからも、いつか結婚して、子供が出来て、死ぬまで、この平凡な生活がずっと続いていくはずだった。今日、弟が行方不明になった。弟と入れ代わって、弟の部屋にやってきた異世界の元魔術師。智里は弟と平凡な人生を取り戻すことを決意した。

物語の始まり

物語は、いつでも媒体の向こうだった。色鮮やかに描かれた文章や絵や、テレビ画面のその向こう。

毎日を平凡に過ごすことを望んでいた。弟とは喧嘩ばかりだし、父親とは反抗期だからと言い訳して口を利かなかったこともあった。学生のときはテストの結果に一喜一憂した。就職の面接は緊張しすぎて頭が真っ白になっていた。恋もした。それなりに生きてきた。

怪奇現象は起きた事もなく、家族に交通事故が起きた事も、それを見たこともない。戦争だって悲しいことではあるけれど実感はわかない。普段の生活から切り離された出来事は、全て何かの向こうだった。

これからも、いつか結婚して、子供が出来て、死ぬまで、この平凡な生活がずっと続いていくはずだった。

今日、弟が行方不明になった。

現実の向こう側　1

コーヒーとトーストの香りが今日も我が家を包んでいる。
「お父さん、おはよう」
「ああ、智里。おはよう」
玄関を開けるとちょうど2階から父親が降りてきた。ポストから取ってきた朝刊を渡す。リビングに入ると香ばしい匂いが更に強まった。母親は智里が用意しておいた小分けのサラダを各人の席へセットしている。
「あら智里、そろそろ優希を起こしてきてくれる？」
「ハイハイ」
母に頼まれて、智里はめんどくさそうに返事をした。父のめくる新聞の音を聞きながら階段へ足をかけた。
日曜日だから寝かしておけばいいのに、智里の母親は昔気質で、食事は全員揃って食べることを決まりとして崩そうとしない。思春期はいろいろと揉めたりもしたが、今では当たり前の生活として受け入れている。煩わしいときは友人の家に泊まったり、賃貸アパートのカタログを持ってきて一人暮らしをしてやろうかと妄想にふけったりする。一人暮らしは実行に移していないから、なんだかんだ言ってもやはり家は居心地いいのだろう。
弟もいい加減慣れて朝は自分で起きてほしい。毎日起こしてやらないといけないこちらの身にもなってほしいものだ。

弟の部屋のドアを叩いたとき、声が聞こえた。今日は起きているのか、珍しいこともあるものだと感心して、いつものように一声かけてドアノブを回した。
「姉ちゃん入って来るな！！」
ドアと壁の隙間から弟の大声が響いた。驚きドアノブから手を放したがしかし、ドアの隙間は開いていく。少しずつ見えていくカー

ペットには円をいくつか重ねた模様が描かれている。青いパジャマ姿の弟がその模様の真ん中に立っていた。何かを持っているようだが、ここからでは身体で隠れていて見えない。その背中が振り向こうとしたとき、目も開けられないほどの光が全てを包み込んだ。

「優希！！」

名前を叫んだ。声が出ているかはわからなかった。辺りには静寂が満ちた。

とっさに目をかばった腕を下すと、光は既に収まっており、部屋の中が見渡せた。

いつもと変わらず乱雑に物が置いてあり、ベッドから布団が落ちている。机の上には書きかけのレポートが置いてある。

「ゆうき…？」

ただそこに弟の姿はどこにもなかった。

ただそこには黒い髪の弟ではなく、

「あなた、だれ？」

薄い金色の髪をした男性がしゃがんでいた。

現実の向こう側　2

「ごちそうさまでした」
食後のコーヒーを飲み終え、智里は席を立った。思いがけず大きな音が響いて、咎めるように母親が顔を上げた。
「智里、さっきからどうしたの。変よ」
「…ごめんなさい、ちょっと気分が良くないみたい。少し横になってくるね」
「あら、風邪かしら。昨日夜おなか出して寝てたの？」
私は変じゃない。変なのはお母さんたちでしょ、と叫びたい気持ちを抑えて、智里は弱々しく答えた。的外れな返答をした母が心配そうに見ているが、笑顔を返せたかはわからなかった。
それよりなにより、隣にいる男から早く離れたかった。

弟が消えた後、男は入り口に立っている智里に気付いた。欧米人より薄い金髪がさらりと揺れる。スカイブルーの瞳が智里を見上げた。
そして笑って言ったのだ。
「おはようございます、チサト」

部屋のドアを閉めて鍵をかけた。合鍵はリビングにあるが、めったに親は入ってこない。ベッドに腰を下ろして、顔を手で覆った。
熱はない。熱に浮かされてみた夢幻じゃない。
わかっていた。
さっきのことは現実なんだ。どんなに非現実的だったとしても。
どんなに受けいれ難い現実であろうとも。

「お父さんお母さん！不審者が！優希が！！」
男の言葉が耳に入った瞬間、智里は叫びながらリビングに駆け込んだ。二人は不審者と聞いて腰を浮かせた。父の腕に縋り付いて必死に声を出した。
「お父さん、優希の部屋に不審者が！！優希が消えちゃった！！」
どうしても声が震える。優希が消えてしまったのを、智里はこの目で見たのだ。
母は背中を支えてくれ、父は智里の剣幕に顔を厳しくして廊下のほうを向いた。智里も振り向くと、不審者の男が階段から降りたところだった。ゆっくりと廊下を歩きリビングに入ってくる。
「お父さん！」
智里が父の腕に力をこめると、逆に父の身体から力が抜けたのがわかった。掴まれていない方の手で娘を落ち着かせようと背中を叩いた。
母親が男へ振り向き、笑顔で言った。
「あら、おはようございます。イルさん」

そのあと、智里の主張は寝ぼけていたということにされた。
男の名前はイルバード・ラフマン。イギリスの交換留学生で、１ヶ月前からこの家にホームステイしていると言われたのだ。
外国人と言われてもわからないが、それにしては色素が薄い気がする。いや、存在感がないというのか。智里にとってイルバードは、この世界の人として必要不可欠な何かが欠如しているように見えるのだ。まるで幽霊のように。
イルバードはホームステイ中優希の部屋を使っているという。
その優希はどこに行ったのだ、と智里は両親へ詰め寄った。二人は顔を見合わせて困惑している。智里が何も覚えていないのを不思

議に思っているようだ。
「優希はイルさんと交換で留学して、今はイギリスでしょう？覚えていないの？」
智里も見送りに行ったじゃないの。そう母に言われても覚えがないものは覚えがない。むしろ、昨日は智里のプリンを優希が食べて大喧嘩したのだ。朝食の支度のときに空の容器を見て怒りがぶり返したのをしっかりと覚えている。喧嘩を仲裁したのは母だった。優希は天然の母に逆らえないから、いつも仲裁役は母だ。
ドッキリ？いや、母は演技などできる人間ではない。エイプリルフールの嘘だって毎年バレバレで智里が引っかかってあげているのだから。
それなら、平凡な人生にはあり得ない答えしか出せない。まるでファンタジーだ。記憶を操作できる、なんて。
イルバードを見ると、笑顔を浮かべていた。しかし、目は笑っていない。
「さあ、朝ごはんにしましょう」
当たり前にイルバードに席を勧める母を見て、智里は唇を噛んだ。

これ以上思い出しても仕方がない。
身体をベッドに横たえて、窓を見上げる。雲のない青い空。
私が、みんなを助けてみせる。優希を取り戻して、両親の記憶も取り戻す。平凡な人生へ戻るのだ。
イルバードの瞳のようなスカイブルーを睨みながら決意した。

現実の向こう側　3

優希は、あの光の中だ。
妙に確信があった。どうしたら、優希が今いる場所がわかるだろう。あの光に入れるだろう。
イルバードに聞くことは「却下」自分の心の中で即答し、あくまでもそれは最終手段にとっておくことにする。あんな得体の知れない人とは出来るだけ接したくない。
「…あれが幽霊だったらどうしよう」
思わず頭に浮かんだ考えに顔が引きつる。
智里は幽霊が嫌いだ。霊感などないが、暗い部屋の隅なんて絶対に見れない。シャンプーをするときは出来るだけ洗剤が顔にかからないように—目が開けていられるようにする。顔を洗う時は丁寧にだが迅速に。居間で堂々とホラー番組を見る優希や母に何度喧嘩を吹っ掛けたか数える気もしない。
「生きてる存在感がないくせに出てくるなって話よね」
最悪の可能性はなるべく隅に追いやって、優希が消えたあの場面を何度も思い返す。何かおかしいところはなかっただろうか。
青いパジャマ。優希が一番お気に入りにしていたパジャマだ。特にへんなところはない。
優希が持っていたもの。よく見えなかったからおかしいかどうかわからない。しかも優希が持っているので現物がないため調べようがない。
机の上のレポート。明日提出とか言ってた英語のレポートのはず。見てみないとわからない。
落ちていた布団。
「あいつ寝相悪いからなぁ。…カーペットにあんな模様あったかしら」
円がたくさん重なったような模様。光が溢れたのは一瞬だったか

ら良く見えなかったが、あの模様から溢れ出たような気がしてきた。
確かめなくちゃ。
智里は決心すると、ドアの鍵へ手を伸ばした。

優希の部屋は扉が閉まっていた。ノックをしたが返事がない。部屋の主はまだ戻ってきていないようだ。ドアノブを回すと、鍵はかかっていなかった。
「優希がいない部屋に入るのは久しぶりだな」
入るのは優希を起こすときだけだ。話をするときはたいてい居間だし、お互い普段は部屋の扉を開けっ放しにしている。閉めるのは寝るときと勉強のとき、あるいは一人になりたいときだけだ。
そういえば、前に比べたら一人で部屋に篭ることが多くなった。それも、智里たちでも良く考えたら、程度だ。
「もっと踏み込んでやればよかったな」
重いものが体の奥に沈んでいく。
少しでも重みを和らげようと深呼吸して扉を開けると、部屋の中は朝のままだった。それもそうだ、あの男は智里のすぐ後についてきたのだから。
書きかけのレポート。高校のころ好きだったヴィジュアルバンドのポスター。新刊が出ると今でも買っている少年向けのコミック。狭い部屋に似合わない大き目のベッド。そのベッドに似合わない、昔から使っている子供向けのキャラクターが描かれた枕。
「これじゃないと良く眠れないんだっけ。次の誕生日プレゼントは新しい枕かな」
それから渋い柄の布団。布団も朝のまま床に落ちている。
その布団を拾ってやる。優希は昔から寝相が悪かった。それにしてもこの落ち方はひどい。優希もろともベッドから落ちたみたいだ。苦笑して綺麗に敷きなおした。
枕元に置いてある目覚まし時計が目に入った。

「高校に入学したときに買ってあげたんだっけ」
あの当時、智里はアルバイトと卒論が忙しくて、自分が寝坊をしたり、優希を起こしてあげるのも嫌になったりで此れ幸いとプレゼントした。優希はわが意を得たりと笑って「これが必要なのはオレじゃなくて姉ちゃんじゃないの」と憎たらしい口を利いたのだ。
「それでやっぱり喧嘩になって、お母さんに怒られて」
蘇る思い出に苦い笑いがこみ上げる。
そのあとこっそり「優希、嬉しそうな顔してたのよ」と母に耳打ちされた。
「優希、ごめんね」
あの日罰の悪い思いをして言った言葉を繰り返す。今は、あの時どうして手が伸ばせなかったのかという後悔だけだ。伸ばせたらせめて、優希を一人にすることはなかったのに。思わず握り締めていた布団の皺を綺麗に伸ばし、カーペットへ視線を移した。
朝のあの模様がなくなっていた。

「何をしていますか、チサト」
模様の消えたカーペットを凝視していると、廊下から声が聞こえた。あの男だ。
振り返るとマグカップを乗せた、小さなお盆をもったイルバードが入り口に立っていた。その顔は、智里が勝手に部屋に入っているというのに、笑顔だ。
「何かお探しですか。一緒に探しましょうか」
手にしたお盆をローテーブルに置いて近づいてくる。
足元から恐怖心が込み上がってくる。膝が震えそうになるが、イルバードを睨み付けて必死に押さえた。イルバードは困った顔で智里を見下ろしている。
その表情を見て、今度は怒りが込み上げてきた。
人の弟どっかにやっておいて、白々しい。困りましたって顔して

るんじゃないわよ。
心の中で毒づく。恐怖心が消えず、言葉に出すと声が震えそうだった。唇をかみ締めて、イルバードの横をすり抜ける。
「あ、チサト」
「なんで私の名前知ってるのよ」
振り返らず、入り口でそれだけ言えた。会った瞬間からイルバードは智里の名前を呼んだ。しかも呼び捨てだ。それが不可解で、不愉快だ。
それは、とイルバードが語りそうになって、でも今は何も聞きたくなくて智里は真正面の自分の部屋に飛び込んだ。扉をつかんで、もう一度イルバードを睨み付ける。
「優希を返してよ」
震えはしなかったが、思ったより大きい声は出なかった。
扉を閉める瞬間のイルバードの顔が智里の目に焼きついた。
驚いて、困って、辛そうで、泣きそうな表情がごちゃ混ぜになった笑顔だった。

現実の向こう側　３（後書き）

読んでくださっている方が想像より多く、とても嬉しいです。
申し訳ないのですが、次回より毎週水曜２１時頃の更新とさせていただきます。
筆が遅くて申し訳ありませんが、どうぞよろしくお願いします。

現実の向こう側　4

智里は憂鬱だった。残念ながら、今日はまだ始まったばかりだ。これから昼食と夕飯がある。家で食べるならあの母親のことだ、あと2回もあの男と顔を合わせなければならない。

「家にいたら顔を見る可能性は上がるよね」

3度目は思わず手が出るかもしれない。何を口走るかわからない。外出することを決めた。財布の中身は1，500円とちょっと。通帳には入っているが、日曜日の手数料は薄給には辛い。いざとなったら下ろす覚悟を決めて、金曜日に下ろしておけばよかったと本日2度目の後悔をした。

「ファストフードで済ませるか」

赤と黄色の有名ハンバーガー店なら2回食べても足りるだろう。開け放した窓の外は夏の空が広がっている。テレビニュースでも連日記録的な猛暑だと騒いでいる。

「今日も暑いよね」

クローゼットを開けて、外出着を選ぶ。シンプルな七分袖のパーカーにジーンズを合わせる。セミロングの髪の毛は少し高めにお団子にした。

日焼け止めを大目に、いつもの仕事用よりずっと軽めに化粧をして、そこではたと気付いた。

「あの男、まだ部屋にいるのかな」

部屋を出るときに鉢合わせは困る。あと他に出口は一つ。

「窓…」

ここは2階だ。この部屋の中で何かロープの変わりになるものは、と視線を動かす。

「シーツと、カーテン」

窓に手をかけ下を覗き込んだ。高さに冷や汗が出る。

ショルダーバックを肩にかけ、唾を飲み込んだ。

智里は覚悟を決めた。

「あら智里、出かけるの？」

智里は硬直した。ちょっとねと笑いながら玄関へと足を勧めようとする。

リビングから母が出てくるところにばったりあったのだ。

物語の中の自由奔放なお姫様のようにカーテンやシーツを繋いで窓からの脱走なんて、智里には出来なかった。学生のころから体育の成績は良くなかった。意地でも3は取ったが。

「抜き足差し足って、本当に朝から変よ、あなた。体調が悪いって言ってたじゃない。熱はないの」

手をおでこに当てられた。少しかさついた、いつもと変わらない母の手に涙腺が緩みそうになる。

「大丈夫？熱はないようだけれど。今日は病院やってたかしら」

「さっき横になったから大丈夫！でもちょうど風邪薬切れてたみたいだから薬局行ってくるね！」

「あらそう、やっぱり風邪なのかしら。早く帰ってきて横になりなさいね」

「はーい！いってきます！」

風邪を引いたにしては元気に手を振って、智里は玄関を飛び出した。下ろしたての黒いサンダルのヒールが音を立てる。

智里がゆっくりドアを開けて様子を伺うと、幸いなことに優希の部屋は閉まっていた。イルバードに会わずにすんだが、とっさの嘘を言ったせいで風邪薬を買わなくてはならなくなった。母は細かいことを良く覚えている。買わないで帰ったら何を言われるか。本日3度目の後悔をした智里だった。

とぼとぼと駅までの道のりを歩く。仕事場までの定期があるので、

市立図書館で時間でもつぶそうかと思ったのだ。可能性は低いが、もしかしたら優希を助けるための手がかりがどこかに眠っているかもしれない。
　そして図書館に行ったら友人にでも会ったことにして母親に食事がいらないことを連絡すればいい。
「やっぱりお金下ろすか。今月使いすぎたかな」
「何に使ったんですか？」
「本買いすぎちゃったんですよね、読みたい新刊多すぎて」
　思わず答えを返して、智里は足を止めた。自分を追い越して足を止めた人物を見上げる。
「そうなんですね。相変わらずチサトは本好きですね」
　笑顔のイルバードがそこに立っていた。
「わたしもご一緒してよろしいでしょうか」

「これは美味しいですね。初めて食べました」
　イルバードは輝かしいばかりの笑顔で新発売のチキンタツタバーガーを頬張っている。色素の薄い顔にソースがついていた。
　ここは駅前の有名ハンバーガーショップ。日曜のお昼ということで、満席近くまで埋まっている。窓際のテーブル席から赤ん坊の泣き声が響いてきた。
「つい最近発売になったばかりですからね。高いですし。ラフマンさん、そこ、ソースが付いてますよ」
「どうぞイルと呼んでください、チサト」
「結構です、ラフマンさん」
　赤ん坊の母親は泣いている子に振り向きもしないでベビーカーを揺らし、友人と話に盛り上がっている。もちろん赤ん坊は泣き止まない。周りの客もちらちらと迷惑そうに見ているが、全く意に介せずだ。
　それをぼーっと見ながら智里はオレンジジュースを啜った。自分

の分のチーズバーガーは既に食べ終えた。
　お金を銀行で下ろし、お昼だけは一緒に取るということでイルバードに納得させた智里は、ハンバーガー店へ入ってから本日４度目の後悔をした。イルバードは財布を持ってきていなかった。
「もう少し左です。もう少し、ああ、もういいです。後でトイレでも行ってください」
　ソースをふき取らせることを断念した智里は、座りなおした。少しくらいソースが付いていようが綺麗な顔だ。このくらい人間味があったほうが緊張せず話せる。単刀直入に切り出す。
「私についてきた理由はなんでしょうか」
「知りたいことがあるでしょうから。人の目があるほうがチサトが落ち着いていられるでしょうし」
　ハンバーガーを食べ終えて笑顔のイルバードに対し、智里は渋面を作る。
「呼び捨て、止めてくださいって言ったでしょう」
　あと、落ち着かないからソース落としてきて欲しいんですけど。
　更にソースがついて人間味以上に面白みが出てしまい、笑いをこらえるのに必死になってしまった智里を見て、イルバードは顔を赤くしてトイレへと駆けたのだった。

現実の向こう側　5

戻ってきたイルバードは、座るなり真剣な顔をして語りだした。
「チサトでしたら、ファンタジー小説は読んだことがおありでしょう。地球以外の世界へ、人々が入り込む物語です」
「異世界トリップ？」
読んだことのあるジャンルを思い出しながら、智里は聞き返した。
イルバードは頷く。
「はい。わたしはこの世界と異なる世界から来ました。本当のことです。驚くのはわかりますが、そう頭から疑わないで下さい」
智里の怪訝な顔を見て、慌てて言葉を紡いだ。
「私の頭も正常です」
「とりあえずは聞きますので、どうぞ続けてください」
イルバードは不本意な顔をしていたが、説明を始めた。
「わたしは、わたしたちの世界のウェルテサザーラント、わたしたちはウェルテスと呼んでいます。そこからやってきました。イルバード・ラフマンは地球で使っている名前ですが、本名はイルバディード・」
「ラフマンさんには興味ないので、優希はどこに行ったんですか」
ああ、そうですよね。興味、ないですよね。イルバードは視線を落として悲しそうに呟いた。
「それで、優希は」
「ユウキは、わたしと入れ代わりにウェルテスにいます。本当に異世界にいます。あとで証拠を見せますから、今は聞いてください」
イルバードは気を取り直して語り始めた。

ウェルテサザーラント皇国は、2年前まで戦乱に包まれていた。大国ローゼンスの一方的支配から独立するために戦っていたのだ。

ローゼンスは強く、ウェルテスは苦戦を強いられていた。兵糧も残り少なく、あと何ヶ月ももたないかもしれないという時まで追い込まれてしまった。

そこで皇は国秘兵器と呼ばれる武器を使うことを許可する。その兵器は、異世界から召喚した人間にしか動かせないと伝えられていた。

イルバードは当時、王宮魔術軍参謀であったが、極秘の任務を課せられた。異世界の人間を召喚する際、その呪文を唱え儀式を司る。大抜擢だった。しかし、それには大きな副作用がついていた。召喚する人間の代わりに、儀式を行うものが異世界へ召喚されてしまうのだ。

異世界の人間の使命が終了した暁には、元の世界へ戻れるが、いつになるかわからない。1ヶ月か、1年か。はたまた、使命を終了させることが出来ないかもしれない。途中で殺されてしまうかもしれない。

異世界の情報もまたあまりなかった。古い文献からして、危険は少ないとあるが、あまりにも古い情報で信憑性は乏しかった。

リスクは大きかった。しかし、皇も、イルバードもそれに賭けたのだ。

そして、儀式は行われた。選ばれし異世界の人間が、ユウキだった。

「ユウキは勇敢でした。初めは驚いて、逃げ出そうとしましたが、自らの使命を果たしてくれたのです」

イルバードは厳しい顔つきを一変して、笑顔になった。

「そしてユウキはこの世界に還ってきました。わたしもわたしの世界へ還れました」

本当に嬉しそうなイルバードを見て、智里も肩の力を少し抜いた。まさか、既に異世界に行ったことがあるなんて知らなかった。ふと、

あることに気付いてイルバードに視線を向けた。
「ちょっと待って、そのときもあなたは家にいたんですか？2年前って言いましたよね」
「そのことについては、後でお話します。まずは一連の流れを説明させてください」
笑顔で押しとどめられ、智里は口を閉じた。この人の笑顔は、人を操る力があるのかもしれない。そんなことをぼんやりと思った。
「話を戻しますが、ウェルテスは、無事大国ローゼンスより独立することが出来ました。他の国々も追随し、今ではローゼンスの領土はかつての１０分の１ほどになりました」
２年足らずで国土が１０分の１になるとは凄いことだ。日本で言えば県と市の大きさの違いを思えばいいか。
「われわれは特に領土を広げることを望んではいませんでしたから、後から独立した国々とわがウェルテスは同盟を結び、ウェルテスの脅威は外にはなくなりました。それから2年、ウェルテスは順調に国を豊かにしていったのです」
「でも、また優希は召喚された」
イルバードは重々しく頷いた。その顔から笑顔が消えた。
「またユウキの力を借りなければいけない事態に陥りました。皇位継承問題です」

ウェルテスの皇は、先の戦乱の後亡くなった。人々の噂では暗殺されたと言われている。
前皇には娘が一人いた。皇女ラキアージュ。心優しい聖女である。彼女は民衆に好かれ、貴族たちも多くがラキアージュに忠誠を誓っている。
しかし、やはりというかなんというか、反発する者は必ず出てくる。その者たちは忠誠を誓った振りをし、皇女暗殺を企んでいるのだという。

「ラキアージュ様はユウキを呼ぶことに反対しておりました」
イルバードは背筋を伸ばし、口調を改めた。
『わが国の問題はわれらのもの。異世界の者を頼りにしてばかりでは、わたしたちはこの先の平和を守ることが出来るのでしょうか』
ラキアージュ皇女の言葉なのだろう。イルバードは誇らしげに言葉を口にした。
「そう仰っていました。しかし、ラキアージュ様では抑えきれない意見もあります。重鎮はラキアージュ様を軽んじています。女は、ただ座っていればいいのだ、と」
同じ女として、人を貶める言葉は気分が悪いものだ。智里は思わず顔に出してしまったのだろう。イルバードが苦笑した。
「そう怖い顔をしないでください。上に立つものというのは得てしてそういうものです。互いが自分の都合のいいことを押し付けあう。反発すれば蹴落としあう。民衆にはなんら関わりのないところで全てが決定されてしまう。民衆が否を唱えれば捕らえられる」
智里は頷いた。姿かたち、役職は違えど、現代日本にもそういう輩はいなくならない。イルバードも頷き、口調を輝かせた。
「ラキア様はそれをなくそうとしてらっしゃいます。民衆の意見を取り入れ、より良い国を作りたい。それがラキア様の夢です。私はそれをお助けしたい」
イルバードの皇女の呼び方が略称になった。親しい人なのかもしれない。智里はそこまで考え、そんなことを考えた自分に驚いた。イルバードはそんな智里に構わず話し続けている。
「ラキア様には信頼の置ける味方がとても少ない。忠誠を誓っている貴族たちは腹の中で何を考えているかわかりません。ユウキが行った今でも両手に余るほどしかいないでしょう」
「ええと、ラフマンさんが残っているんじゃダメだったんですか」
「ええ、私では力が及ばず。ラキア様の身辺を守ることしか出来ま

せん。首謀者を捕まえることは到底出来ないでしょう」
　そんなに残念な様子ではないイルバードに、智里はどんな表情をしていいのか困ってしまった。とりあえず首を傾げてみた。それをみてイルバードは安心させるように笑顔を作る。
「ユウキはわが国では英雄とされています。独立の英雄です。そんな彼がラキアの傍にいてくれれば、反対派は沈静化するでしょう。民衆からの支持はもとより、ユウキは貴族からも支持されていますから」
　とうとうラキアになった。もしかしたら恋人なのかもしれない。それなら自分で守りたいと思うのではないだろうか。よくわからない。
「優希にそんなカリスマはあるように思えないんですけど」
「まあお身内はそう仰るかも知れません。しかし、わが国では英雄なのです。国秘兵器を動かした、英雄です。その事実は誰にも覆せません」
　これが、ユウキを召喚した理由とその背景です。
　イルバードはそう言って話を終えた。智里を見つめて、その目に力をこめる。
「お願いです、チサト。わが国を救うため、ユウキの帰還を待っていただきたいのです。急いては事を仕損じます。どうか、お分かりいただけないでしょうか」
　智里もその目を見つめ返す。そして答えた。

「お断りします」

現実の向こう側　6

その時のイルバードの顔は、きっと後で思い返しても笑えるだろうと思う。瞳が落ちそうなくらい目を見開いて、口はぱくぱくと開閉を繰り返している。対して智里は笑顔で言った。

「私は、早く弟を取り戻したいです。家族がいて、お互いの人生をゆっくりすごしていく。平凡な人生でいいんです。私たちの物語は本の上にあるわけではありませんから」

そのためならあなただって利用させてもらいます。

今度は眉を寄せて口をへの字にして、イルバードはとても困った顔をしている。智里はそれを見て、苦笑する。笑顔だけじゃなくて、色々な表情をする人だな。

「家族を一方的に連れて行かれて、起こらない人がいますか？いくら向こうでの仕事が終わったら帰ってくるといっても、前回は命の危険があったんでしょう。怒らないでいられますか」

落ち着いて、冷静に。智里は自分に言い聞かせて口を開く。怒鳴り散らすなんてしたくなかった。イルバードは眉尻が下がりますます情けない顔になっていく。

「家族の記憶までいじられていて、それだって怒ってるんです。私の記憶がいじられていない理由はわからないけれど、もしいじられて普通にあなたに接していたら優希が帰ってきても、私たちは知らないままになるんでしょう。そんなのは不公平です」

優希が何を思って、異世界にいたのかは本人に聞くまで想像しか出来ない。全て納得をしていたのかもしれないが、待っているしかできない方は何をされたって納得なんてできないのだ。

「それにあなたはまだ全て話していないでしょう。どうやって記憶を操っているのか。それを説く方法。さっきの、2年前のこと」

智里はイルバードの色素の薄い瞳を覗き込んだ。最初に見たときと同じ、スカイブルー。最初に見たときでさえ恐怖と戦いながらも

吸い込まれそうだと思った。
イルバードは智里の瞳を見つめていたが、やがて苦笑した。スカイブルーの瞳が細まる。
「そうですね、許せませんよね。ですがそこから先はここでは話せません」
ユウキの部屋でお話しましょう。
そう言ってイルバードは席を立った。途端に空気の流れが変わった。
窓際で泣いている赤ん坊の声が聞こえた。通路の向こうの女子高生らしきグループの話し声も聞こえた。その中の一人がこちらを向いて驚いた顔をしている。
「どうかしましたか、チサト」
イルバードが智里を立たせようと手を差し出した。通路の向こうから黄色い声が上がった。
「あのヒト、ちょーカッコイイじゃん！」
「芸能人かなあ、見たことないよ！」
わいわい盛り上がってる女子グループにため息をついて、イルバードの手を押し返した。イルバードは避けられた手を見て少し悲しそうな顔をする。
きっと今まで話してたときはイルバードが何かしていたせいで、他の客の声が遮断されていたんだろう。あとで全部話してもらわないと。
「とにかく、薬局よって帰りましょう」
女子グループの睨みをスルーして、智里は席を立つ。頭痛薬も買わなくちゃ、とため息を吐いた。

家に帰ると、心配そうに母が待っていた。
「早く帰るって言ってたのに、遅いじゃない。風邪薬、救急箱に入ってたわよ」

さっきは見当たらなかったのに、と適当なことを言って智里は2階へ上がった。
「薬飲んでしばらく横になってるからほっといてね」
階段の中ほどで止まる。玄関の方を見ると母はイルバードと話をしていた。
イルバードが母親にお辞儀をして、こちらへ向かってきた。
「ごめんね、出来るだけはやく元に戻すからね」
智里は呟くと、階段を上がり始めた。
その後姿をイルバードが見ていた。

「チサトの記憶に関しては私にも詳しいことはわかりません。あくまで推測です」
それでもよろしいですか、と尋ねるイルバードに智里は頷いた。自分には全くわからないから、推測でもある程度理解できればいい。
「まずは記憶交換ですね」
人には、縁という糸のようなものが張り巡らされているとイルバードは言った。
「縁なんて古い言葉を知ってるんですね」
「これは古い文献に載っていましたから、この世界にとっても古い言葉なんでしょうね」
「ということは、結構な頻度で召喚があるんですか」
「さあ、私が生まれてからはユウキが初めてでした」
イルバードは軽い咳をし、話を戻した。
「その情報を一時的に差し替えます。差し替える情報は断片的なものですが、それで十分です。人はその断片的な情報を組み合わせ、自分の知識で補って一つの情報にしてしまいます。大抵の人は同じような筋道で情報を組み合わせるので、記憶の修正をする必要はほとんどありません」
智里は頷いた。国語の問題という前提があり「猿」と「木」と「

落下」というキーワードがあれば大抵は「猿も木から落ちる」ということわざが思い浮かぶだろう。理にかなっている。
おそらく今回は優希の記憶を前提として「イルバード」「留学」「交換」辺りの情報で差し替えられたのだろう。
「これが記憶交換です。この差し替えの情報は召喚移転の魔方陣に組み込みます。魔方陣を発動すると同時にユウキの縁全てに自動的に差し替えが行われます。わたしがこの場で上書きすることはできません」
二人はローテーブルを挟んで床に腰を下ろしていた。智里は薬局で買ってきたペットボトルを差し出す。イルバードは礼を言って受け取った。自分の分も蓋を開ける。
「召喚自体国家で認められた場合でしか使用できません。その魔方陣に組み込まれている記憶交換も同じです」
そして、チサトの場合ですが。イルバードは水で唇を湿らせた。
「魔方陣が発動する場合、一定の範囲に結界が張られるようです。おそらく、発動時にその結界の内側に居たため、記憶交換が行われなかったのではないかと思います」
智里はゆっくり頷いた。専門家の推測だ、否はない。
「2年前は私も記憶交換がされてたんですよね」
イルバードは首肯して笑顔を浮かべた。それがどこか悲しそうだったのは一瞬のことで、智里は見間違えたのだと思った。
「2年前のチサトは優しかったですよ。いつも笑顔で、右も左もわからないわたしに、なんでも根気よく教えてくれました。その時から呼び捨てにさせてもらっています」
今のチサトを思うと、あの時は猫を被っていたのでしょうね。そう語って苦笑した。
確かに、智里は人見知りをする。だからこそ家族や気の置けない友人の前以外では猫を被ることは良くある。それをわざわざ言わなくてもいいのに。
恥ずかしくて、なぜか少し苛立ってしまって顔を上げられない。

きっと今顔が赤くなっている。記憶がない自分のことなんて聞かなければ良かった。
「優希が！」
話題を変えようと出した声は思ったより大きくて、自分でびっくりしてしまった。首をかしげて促すイルバードをちらりと見て、智里は息を整えた。もう猫を被りなおす必要はない。あれだけ怖がったり、食って掛かったりして素の自分を見せてしまっている。
「優希があなたたちの世界にいる証拠があると、先ほど言っていました。それは一体」
「ああ！」
どういうことでしょう、と続ける前にイルバードが声をあげた。ジーンズの後ろポケットから懐中時計を取り出す。ベルト通しにくくりつけていた鎖をはずして智里の前に置く。
「これです」
明るい笑顔のイルバードを見上げ、自分の前に置かれた懐中時計を見下ろす。蓋に鷹の模様が彫ってある。見た目は普通の懐中時計のようだ。
「どうぞ、開いてください」
促されて手にとってみる。裏にはＩ・Ｒ・Ｃと彫ってあった。その横には小さく花も彫ってある。何の花だろう。菊か、マーガレットか、コスモスのようにも見える。優希だったらわかるのかもしれない。花には案外詳しかったから。
「チサト？開きませんか？」
考え込んでいたため、いきなり出てきた手に驚いて懐中時計を落としてしまった。
「ごめんなさい」
「いえ、どうぞ」
膝元に転がってきた懐中時計を拾い、蓋を開けて再び智里の前に置く。なんだか挙動不審になっている自分にため息をついて、智里は文字盤を見下ろした。

「これ、真っ黒ですけど。文字盤は？」
「ユウキのことを考えて、盤面を見つめてください」
不思議に思うが、今日は不思議なことだらけだ。考えることを諦めて智里は素直に黒い盤面を見つめながら、弟のことを考えた。
今朝、消えた場面。昨日プリンを食べられて喧嘩をした事。プレゼントした目覚まし時計。子憎たらしい口の利き方。
いくら考えても黒い盤面は変わらない。思わずイルバードを見ると、にっこり笑って懐中時計に手を伸ばし、避ける暇もない智里の手ごと懐中時計を包んだ。
「ラフマンさん」
「チサト、教えてください。ユウキはどんな子ですか」
戸惑いの声を出した智里に、イルバードは尋ねた。

現実の向こう側　7

手に触れた温もりに、智里は戸惑っている。ゆるく包まれているだけなのに手を離すことができない。智里だって異性と手を繋ぐことはあった。恋人だって親には内緒でいたこともある。それなのにまるで中学生のように緊張するなんて、今日の自分はどうかしている。智里は目の前の綺麗な顔を見上げて小さく息を吐いた。

「チサト、答えてください。ユウキはどんな子でしょうか」

この人が綺麗な顔をしているせいだと責任転嫁して、智里は「弟」を言葉に表した。

「5歳離れた、憎たらしい弟です。甘えん坊で、わがまま。プリンが好きで、納豆が嫌い。ねばねばするものはあんまり食べなくて、私が頼んだとろろ蕎麦を勝手に一口食べて『いらない』なんて押し返してきて。いつも売り言葉に買い言葉で、喧嘩しちゃうんです。でも優希は母には弱くて」

母は天然で、あのペースに誰でも巻き込まれちゃうんでしょうね。

「ユウキはお母さまが好きなんですね」

話が逸れてしまった。イルバードの修正した軌道に乗る。

「そうですね、お母さん子です。それでいて本当に子憎たらしい口を利く子です。知らない人に同じ口利いていたらきっと衝突があるでしょうが、大学では案外お友達が多いようです。忌憚なく話せるお友達に出会えたんでしょう。名前の通り根っこは優しい子ですから」

黒い盤面が歪んできた。瞬きをするが、すぐに視界が滲む。思わず零れた雫をイルバードの親指が拭った。そんなことされた経験がなく驚いてしまった。

「チサトもユウキが大好きなんですね」

優しい笑顔に心が解ける。驚きで涙は引っ込んだが、まだ出てくる言葉があった。

「家族ですから。だから早く帰ってきなさい、バカ」
歪んだ盤面は涙が止まった今でも直らなかった。懐中時計が盛り上がったと思うと黒い盤面が浮き上がった。少しずつ大きくなって、小さいサイズのテレビ画面くらいになった。
『なにやってんだ、イル。姉ちゃんから手を離せ』
けんか腰の優希の顔が映っていた。

智里の目尻に残っていた涙を拭い取って、イルは手を懐中時計に戻した。両手で智里の手を包む。
「わたしの魔力を使っているんですから、トケイに触れていないと通信できないでしょう」
『お前一人だって通信できるんだからお前は時計だけに触ってればいいだろう』
「優希、あんたどうなってるの」
目の前で言い争っている二人にびっくりして智里は問うた。一言声が出せたと思うと矢継ぎ早に言葉が出てくる。
「今どこにいるの？身体は大丈夫なの？怪我はしてない？急に消えちゃって、心配したんだから。お父さんもお母さんも、あんたが１ヶ月も前から留学したとか言い出すし。私しか昨日のあんたを知らないし」
引っ込んだ涙が溢れ出してくる。イルバードが驚いて拭ってくれたが、今度はそれも効果なく涙は後から後から溢れ出す。優希が画面の向こうで焦っている。『ティッシュ、ティッシュそっちにあるからイル取って』優希の指図でイルバードが持ってきたティッシュで目を押さえる。頬も拭って、鼻もかんだ。それを何度か繰り返した。優希はまだ焦った表情をしている。イルバードは笑顔を崩さない。
「不安だったんですね」
「そう、みたいです。優希が目の前でいなくなって、それを私しか

知らなくて、みんながラフマンさんを当然のように受けいれて、まるで私だけがおかしくなったみたいで、怖かったんです」
　しばらく涙は止まりそうにない。イルバードが差し出すティッシュをありがたく受け取った。優希は画面の向こうで神妙な顔をしている。
『姉ちゃん、心配させてごめんな。まさか姉ちゃんの記憶が変わってないなんて、おれ思ってもみなくて。イルバディード、どうなってるんだよ』
　イルバードは先ほど智里に聞かせた推測を繰り返す。
「こんなことは文献にもありませんでしたし、わたしには今から記憶を操作する力はありません。チサトにはこのままユウキを待っていてもらうことしか思いつかないのです」
『そうだよなぁ』
　優希は頭を掻いた。困ったときに頭をかき回すくせは小さいころから変わらない。その仕草に智里はほっとした。弟はどこに行っても弟だ。笑顔になったときに零れた雫を拭って、イルバードに向き直った。
「私も優希の方に行くことは出来ますか」
『姉ちゃん！？』
　イルバードは突然の提案に目を丸くする。深く考えることもなく首を振った。
「それは出来ません。もし国から許されたとしても、召喚は無理でしょう」
　言葉を遮ろうと口を開いた優希を視線で黙らせて、イルバードは続けた。
「先ほどは省略しましたが、召喚というものは、世界の均衡を崩す行為です」
「均衡を崩す？」
「はい、人のいるべき場所は決まっているのだということです。それを無理に引き剥がすのですから、バランスを取らなければなりま

せん」
『つまり、おれがコッチにいるなら、コッチの誰かが地球に行かなくちゃならないんだよ。おれが買ってる漫画であるだろ、等価交換ってやつ』
壁際の本棚には確かにその漫画が置いてある。なるほど、と呟いた。
「したがって、召喚には制約があります。召喚される人と交換される者が同性で、年齢が近くあることが原則とされています。わたしはユウキより少し年を取っていますが、ユウキの見た目が大人びているということで特別に許可されました」
『いや、イルが童顔なだけだろ』
優希の突っ込みに思わず吹いてしまった。イルバードの視線が痛い。
「お若く見えるのはいいことですよ。ラフマンさんはおいくつなんですか」
流れに沿って質問をしたつもりだったが、イルバードは黙ってしまった。代わりに優希が画面の向こうで答えた。
『イルはこう見えて２８歳だよ』
「２８！？」
思わず驚いてしまった。恨めしそうなイルバードの視線に顔が引きつる。短い金髪に男性にしては大きめのスカイブルーの瞳。自分と同じくらいか、優希の少し上だと思っていた。
「話を戻しますが」
イルバードは肩を落とした。
「チサトと年の近い女性の魔術師は城には何人もいます。ですが彼女たちはまだ修行が足りず、儀式をこなす力がありません」
『出来るのはポニーくらいだけど、王宮魔術師じゃないもんな』
「あれには無理です。協調性の欠片もない」
二人の会話は良くわからないが、智里はどうあってもウェルテスに行くことはできないようだ。

「よくわかりました。それでしたら、優希の手伝いをさせてください」
「チサト？」
怪訝にこちらを見る二人を智里は見返した。窓から入る風が乾いた頬を撫でる。
「そちらの問題が終われば、優希は帰ってこれるということでした。私がそちらの国に行って優希を手伝うことはできない。それなら、せめてここからでも手伝えればと思うんです」
話を聞いて考えるくらいしかできないけど、と苦笑する。せめて弟のために何かしたい。智里が手伝えるのは頭を使うことしかできなかった。
「まあ、私も通信はよくしますからユウキと話をするくらいは出来ると思いますが」
『そうだな、姉ちゃん鋭いところあるし。おれも話すことで整理できると思うし』
安堵の息を吐く。これで優希の状況を把握できるし、ストッパーになれればと思う。優希は無茶をすることが良くあるのだ。
『よろしくな』
「これからよろしくお願いします」
智里も二人に対し、よろしくお願いしますと頭を下げた。

平凡の向こう側　1

コーヒーとトーストの香りが今日も我が家を包んでいる。
「お父さん、おはよう。今日も暑そうだよ」
「ああ、智里。おはよう」
玄関を開けるとちょうど2階から父親が降りてきた。ポストから取ってきた朝刊を渡す。リビングに入ると香ばしい匂いが更に強まった。母親は智里が用意しておいた小分けのサラダを各人の席へセットしている。
「あら智里、そろそろイルさんを呼んできてもらえる？」
「私が降りてくるときに声をかけてきたから、そろそろ来るんじゃないかな」
智里がコーヒーカップへコーヒーを注いでいると、2階から降りてくる足音が聞こえた。
「まあ、イルさんは優希と違って毎朝早いわね」
母のカップにミルクを足して智里は、そうだねと小さく笑った。

「いただきます」
手を合わせると、智里は皿の目玉焼きをパンの上に乗せた。一口噛むと、半熟の黄身がとろけてきて幸せに包まれる。
目玉焼きを食パンの上に乗せて食べるのは、ある映画を見てから大好きになった。親にはあまりいい顔をされないが、なんだか特別な気分になって更に美味しく感じるのだ。
「イルさんも真似しないでくださいよ。智里、普通に食べなさい」
父親から窘められて、渋々目玉焼きをパンから外す。横を見るとイルバードもパンに乗せようとしていた目玉焼きを皿に戻した。目が合ったのが気まずくて笑いかけた。

あれから1週間経った。優希と話したのは最初の通信を含めると2回だ。智里には仕事もあり、イルバードと優希の通信の時間になかなか間に合わない。

優希の英雄としての名前が効果を表しているようで、今のところ動きはないようだった。

イルバードとは時間が空いたときにウェルテスの状況を話してもらっている。優希から通信を受けるときに人物や用語がわからないと困るからだ。

いつも部屋だと両親に変に思われる気がして、休みの日は観光目的ということで外出し、話をすることに決めた。優希はそれもそれで変に思われると思うけどと不満そうだった。

智里の車で駐車場が無料のショッピングセンターまで行き、そこのフードコートで話をするのだ。フードコートなら飲み物もあるし、端の席を陣取ってイルバードに結界を張ってもらえば、人目を気にすることもなく話に集中できる。

以前ハンバーガー店で周りの声が聞こえなかったのはイルバードの結界だったそうだ。姿もある程度隠せるという。確かに、あの時女子高生たちは、席を立ち結界を解いたイルバードに突然気がついたようだった。結界を解いてもらうタイミングさえ間違えなければ、うまく活用できそうだ。

そのお礼代わりに飲み物を奢ることにした。

イルバードもお金を持っていることは持っている。優希がウェルテスで使うお金と、イルバードが日本で使うお金を交換したという。しかし姉としては弟のお金をそうそう減らしたくはない。イルバードだってどのくらい日本にいるかわからないのだ。減る一方では困るだろう。

ちなみにウェルテスの通貨はイーニというそうだ。1イーニが銅貨1枚。金貨1枚＝銀貨２０枚＝銅貨１０００枚だという。日本円

とのルートは1イーニが10円程度だそうだ。優希の話だから信憑性は薄い。
優希は今まで貯めていたお年玉5万円分を勉強机経由でイルバードへ渡し、金貨5枚と交換したそうだ。衣食住は完璧だから、町で外食したいときなどに使うと言っていた。おそらくイルバードへの気遣いもあったのだろう。
イルバードは日本で一人のウェルテス人だ。いくら優希と交換してホームステイしていると記憶を変えているとはいえ、智里の両親にお小遣いをもらいたいなんていえるはずがないだろう。衣食住はあるとはいえ大学なんて飲み会が多いところだ。
少しは自由に使えるお金がないと日本でもウェルテスでもやっていけない。

リビングで父とのんびりテレビを見ていると、電話がかかってきた。母が対応する声が聞こえる。その声が驚きの色を帯びた。慌てて電話を切って飛んできた。
「お父さん、浩次がぎっくり腰やっちゃったんですって」
浩次は母の弟だ。奥さんが亡くなってから母方の祖父母と一緒に暮らしている。子供はいなかった。
「浩次叔父さん、大丈夫そうなの？」
「それがね、全然歩けないんだって。おじいちゃんもおばあちゃんももう浩次の世話できるほど元気じゃないし、お父さんとちょっと行ってくるわね」
突然振られた父は驚いたが、素直にしたがって支度をしに行った。今日は念のため向こうに止まるから明日のスーツも持ってね、と父の後姿に母が声をかける。
急展開すぎて智里はついていけない。
「泊まるの？私も一緒に行こうか」
「智里はイルさんのご飯用意してあげてちょうだい。車借りるわね」

「ああ、うん」
智里の許可が聞こえたのかわからないスピードで母は2階に走っていった。洗濯機が脱水終了のメロディを鳴らした。

「智里、行ってくるわね。イルさんすみません。あとよろしくね！」
洗濯物を干していると玄関から母が飛び出してきた。行ってらっしゃいと手を振ると、母は持っていた荷物を振り回した。隣を歩いていた父に当たりそうになる。
飛び出していく車を見送るためイルバードが玄関から出てきた。
「一体、どうしたんですか」
「母の弟さんが腰を痛めちゃって、介護に行くそうです。車を使うそうなので今日は家でいいですよね」
「ええ、まあ。弟さんは大丈夫なんでしょうか」
母から聞いた叔父の具合を伝えると、イルバードが心配そうに頷いた。なんだか心が温かくなって、智里は自然と笑顔を浮かべた。
「いざとなれば病院に行くでしょうから、今はあんまり心配しないでいましょう」
買ったばかりだし、傷がつかないといいけれどな。自分の車の心配をしながら最後の一枚を洗濯ばさみに挟んだ。
「よし、終わり」
「持ちましょう」
空いた籠をイルバードが持ち、玄関へと戻る。お礼を言って空を仰ぐと、東の空に入道雲が見えた。
今日も暑くなりそうだった。

平凡の向こう側　2

「皇女さまの家庭教師だったんですか！？」
昼ごはんが終わり、イルバードのウェルテス講座が始まった。
紅茶の葉に湯を注ぎティーコゼをかける。イルバードはリビングのソファに腰かけた。
「はい。１６歳から2年間教えて差し上げました。わたしが魔術師を辞めたことを心配した父からの命令だったんですけどね。ラキア様は飲み込みが良く、頭の回転も速いのでたびたび舌を巻くような質問をされましたよ」
「他にはどんな方なんですか」
智里はイルバードの直角に座った。砂時計が落ちきったのを確認して紅茶を注ぐ。柔らかい香りがリビングに満ちた。
熱いので気をつけてください、とカップを渡す。軽く礼をしてイルバードは受け取った。
「雰囲気はチサトに似ています。優しく笑うところなんてそっくりですね」
反応に困って紅茶に息を吹きかけた。
「よく花を愛でていました。暗殺の危険があるので外に出しませんでしたが、部屋の窓から庭園を見ていました」
思い出を呼び起こしながら語るイルバードを見る。その嬉しそうな笑顔を見ると、ラキアージュがイルバードにとって素敵なお姫様なんだと想像できた。
「今はわたしの父と共に政務に励んでいるようですよ。とても優秀で、父が褒めてました。ああ、そうそう」
昨日のユウキとの通信ですが、と前置きをしておいて笑い出した。
昨日は急に残業が入ってしまったため、智里は優希と話すことは出来なかった。首をかしげて続きを促す。笑いを収めたイルバード

が可笑しそうに言った。
「ユウキの提案で、一昨日からユウキがラキア様の食事を作っているんだそうです。毒が入ることを懸念して、料理人はつけないようですよ」
「優希ってそんなに料理作れたかしら…」
思わず眉を寄せる。
優希の手料理で食べたことがあるのは、卵焼きくらいだ。それもところどころ焦げていたりしていた。味は悪くなかったので、何とか皇女の機嫌を損ねないことを願いたい。
料理がどうこうの前に、食材はどうなんだろうか。この世界とおなじ食材はあるんだろうか。イルバードがこちらの世界のものを難なく食べているということは、あまり違いはないのだろうか。
心配から疑問へシフトしていく智里の思考を戻すように、イルバードがくすくすと笑った。
「どうなんでしょうね。今日の報告が楽しみです」
とても面白がっている。智里は最近イルバードへの認識を改めた。
口調は丁寧だがよく毒を吐くのだ。しかも間接的に吐くので一見すると毒に聞こえないのが怖い。
特に優希には容赦がないようで、2回目の通信でも子憎たらしい優希をやり込めていた。
「私もラフマンさんくらい言えるようにならないと」
「何をですか」
思わず口から出てしまった決心を聞かれて、笑ってごまかす。
そろそろ本題に入ってもらおうとメモ帳の新しい頁を開いた。シャーペンをノックしたが芯が出てこない。そこの棚に替え芯があったはずだ。
それを黙ってみていたイルバードがチサトを呼んだ。
「そろそろイルと呼んでいただけませんか。ラフマンは偽名ですし、呼ばれなれていません」
そう言って身を乗り出し、立ち上がろうとしてソファーについた

智里の手に、大きくて細い手を重ねた。
包まれた温もりに智里は動けなくなった。

智里は手を捕らわれ、困った声しか出せない。
「ラフマンさん」
「イル、と」
「いやあの」
イルバードは智里をじっと見つめている。これは呼ぶまで手を離しそうにない。
智里は自分がこういう状況苦手なのをイルバードが理解していて、その上で遊ばれてるように感じた。
意地でも呼んでやるかと妥協案を提示する。
「イルバードさん」
「イルですよ」
大人気ない。笑顔のイルバードは親指で智里の手の甲を撫でている。なんだか気恥ずかしくて、智里は視線を逸らした。これは本気で遊ばれている。
他の妥協案を探した。確か、優希がこう呼んでいたはず。
「イルバディードさん？」
「それは嬉しいのですが、お母さんたちはわたしの本名を知りませんので」
あくまで笑顔で強要する。いつの間にか手はイルバードの両手に包まれている。手に力が入らず、顔に血が集まってくる。
赤くなっている顔を見られたくなくて更に顔を逸らした。
「チサト？」
名前を呼ばれてもどうすることも出来なくて、智里は沸々と怒りが湧き上がってくるのが分かった。
「もういい加減にしてください、イルバードさん。私は早くウェルテスの事を知りたいんです」

我慢できなくなって智里が振り返って怒った。顔が真っ赤になっていて目も潤んでいる。
イルバードは澄まして言った。
「仕方ないですね、今はそれで我慢しましょう」
そう言いながら智里の手を持ち上げる。
「いつか呼んでくださいね」
そう言う唇が、智里の手の甲に近づく。
視線が動かせない。イルバードの動きがやけにスローモーションに見えた。
あと数センチで距離がなくなる。智里は思わず目を閉じた。

突然大きな音が響いた。

思わず、智里は手を引っ込めた。なんとなくイルバードの手の感触が残っていて、更に顔が熱くなる。その手を抱きしめてよくわからない安堵の息を吐いた。
「ええと、イルバードさん、何が鳴ってるんでしょうか」
リビングにはぽわわん、ぽわわん、と気の抜けるような音響いている。
周りを見渡してもこんな音が鳴るようなものはない。千里の携帯電話はテーブルの上にあるが沈黙を保っている。
イルバードは大きなため息をつき、ポケットから懐中時計を取り出した。
優希との通信機だった。

平凡の向こう側　3

「ユウキ、あなたはいつもいつもタイミングというものを」
『姉ちゃん、イルのやつ何怒ってるんだ？』
開口一番文句を言い出したイルバードに、優希は困惑した。智里も困って首をかしげることで答えた。
それより、と口を開く。
「一体どうしたの、いつもは夜しか通信しないのに。何かあったの？」
智里が尋ねると、優希は泣きそうな顔をした。２０歳になるのに、相変わらずこの弟は子供っぽさが抜けない。
優希はなぜか内緒話をするようにこそこそと話し出した。
『それなんだよ、姉ちゃん。助けてくれよ』
『ユウキ、そこにいらっしゃるの？』
画面の奥から女性の声が聞こえた。その声を聞いて不機嫌だったイルバードが反応した。優希の顔が強張った。
「ラキア！？」
『あら、イル兄様とお話してらしたの？お久しぶりですわ』
物陰から綺麗な金髪の美少女が画面に現れた。瞳は青みががった緑でまるで宝石のように輝いている。裾がふわりと広がったドレスには細かな刺繍が施されている。絵に描いたようなお姫様だった。
「イルバードさん、この方が…」
「ええ、紹介します。この方がラキアージュ皇女殿下です。ラキア、こちらがユウキの姉君のチサトです」
「智里です、お目にかかれて光栄です」
ソファーから床へ腰を下ろし、智里は一礼した。ラキアージュは優雅に微笑むと、どうぞおかけになってと可憐な手を差し伸べた。

『ラキアと呼んでください。わたくしもチサトと呼ばせていただきますわね。記憶が変わっていないとユウキから聞きましたわ。大変でしたわね。そして、わたくしはチサトに謝らなければいけません』
止める暇もなくラキアージュは床に膝をついた。隣でイルバードが息を呑んだ。画面の優希も驚いている。智里はただそれを見ていた。
『突然、弟君をお借りしました。この無礼を心からお詫び申し上げます』
「ラキア！いけません」
頭を下げたラキアージュに、イルバードが静止の声をかける。しかしラキアージュはそのまま頭を下げ続けた。智里はラキアージュの後頭部を見つめている。
「ラキアージュ様！」
ゆっくりと顔を上げ、名前を叫ぶイルバードを睨んだ。イルバードの眉間には皺が寄っている。二人の間で火花が飛び散ったように見えた。
口を開いたのはラキアージュだった。
『何をいけないことがあるのです、イルバード。あなたは皇女のわたくしが膝を付いてはいけない、頭を下げるのはいけないと仰いますの？事情があったにせよ、わたくしたちが原因で肉親が突然いなくなったのですわよ。ご家族の方はどんなに心を痛めているか、解らないわたくしではありません。記憶が変わっているかどうかなんて問題ではないのです。皇女として、次期ウェルテサザーラント皇としてだけではなく、わたくしは』
新緑が意志を携えて光る。その瞳が智里を見上げる。智里は視線を逸らさず、しっかりと受け止めた。それを受け取って、ラキアージュは再びイルバードに食って掛かった。
『わたくしは、人として誠実でありたいと思っています。心から謝りたいと思えば、自然と身体は折れるものでしょう？人の上に立つものだからこそ、仕方のないことだと諦めず、悪いことをしたらご

めんなさいと言えることが大切であると信じているのです。そうでなければ民はついてこない。そう言ったのはそもそもイルバディード、あなたでしょう！』

イルバードは言い返せず、口を開いたり閉じたりしている。この表情どこかで見たと思いつつ、智里は視線をラキアージュに戻した。もう一度ラキアージュは頭を下げる。

画面の金髪を困ったように見下ろして、優希に目をやると、意外にも真面目な顔をして智里を見ていた。

それを少し寂しく感じて、だが少しほっとして智里の肩から力が抜けた。

ラキアージュ様、と呼びかけた声が小さく感じて、智里は腹に力を入れた。今度は満足できる声を出せた。

「ラキアージュ様、どうぞ腰を上げてください。お洋服が汚れてしまいます」

『イルの負けだな』

弾かれるようにラキアージュが顔を上げる。優希が嬉しそうに笑った。智里の隣では口をへの字にしたイルバードが肩を落とした。その様子をみて三者三様に笑う。

肩を揺らしながら、空になっていたイルバードのカップへ紅茶を注いだ。

目を伏せて智里は言う。

「正直を言えば、あなた方の行為はそうそう許せることではないと思います」

『チサト』

ラキアージュは眉尻を下げた。イルバードと優希は智里を見ている。

『そうですわよね。許してほしいなどとわたくし達が言うことがおこがましいですわ』

「でも私は、ラキアージュ様を信じます」
優希はほっとした顔をした。それを見て智里も笑顔になった。少し苦笑も混ざったが。
「私は、ウェルテスという国を知りません。誰がいて、どんな暮らしをしているか知りません」
ラキアージュは嬉しそうな、だが戸惑った表情をしている。智里が何を言うか心配しているのだろう。
「ですが、ラキアージュ様のお気持ちを知りました。あなたならきっと、ウェルテスという国の、よき指導者になれると思います。何より、優希がウェルテスを大切に思っています。あなたを守るため行動している。いくら協力しなければ帰れないと知っても、嫌なものは嫌という弟ですから。優希が協力すると決めているから、私にはもう口出し出来ません」
そう言うと、優希は頭を掻いた。照れくさいのだろう。イルバードもいつもの笑顔を取り戻した。
「二人には話していますが、私も精一杯お手伝いをさせていただきます。どうぞ、よろしくお願いします」
お辞儀をすると、画面の上から安堵の息が聞こえてきた。優希が笑っている。
『こちらこそ、よろしくお願いいたしますわ。チサト、ありがとう』
顔を上げるとラキアージュが笑いかけてきた。先の綺麗な笑顔より年相応に見える。
智里も嬉しくて笑った。
『チサトは笑うと本当に素敵ですわね、イル兄様』
紅茶を飲んでいたイルバードが咽る。気管に入ったのかとても苦しそうだ。慌てて背中を擦ってやる。
『いつもは暴力的だけどな』
優希がまた子憎たらしく口を開く。それに言い返そうと智里が口を開こうとした。
『まあ、ユウキのような方が弟では多少暴力的になったとしても仕

方ないんじゃありませんの？そもそもいつもユウキがそのように喧嘩を売るのでしょう。自業自得というものではございませんか。わたくしもチサトのような姉上がいたらよかったのに。そうだ、わたくしもチサトお姉様とお呼びしてもよろしいかしら』

怒涛の喋りに度肝を抜かれた。思わずイルを見ると、咳き込みながら「このような方ですので」と涙目で言われた。

『いやいや、おかしいだろそれ』

『あら、ユウキに聞いていませんわよ。というかまずあなたは口の利き方がなっていませんわ。年上を敬いなさいと言われませんでしたの？イル兄様に対してもそうですわね。きっと教えてもユウキが聞いていなかったんでしょう。高が知れますわね』

『なんだと、黙って聞いていれば言いたい放題』

『あら反論できない方が何を仰います』

二人の口論を呆気に取られて見ていた智里にイルバードがいつものことです、と声をかけた。

「少しすれば二人とも落ち着きます。気にしないで待ちましょう」

「はあ、そうですか」

落ち着いてきたイルバードが紅茶を飲む。それを見て智里もカップを口へ運ぶと、結構冷めていた。申し訳ないと思いながら席を立ち、お湯を沸かす。改めて温かい紅茶を淹れなおすまで、ラキアージュと優希の言い争いは続いていた。

平凡の向こう側　4

次期女帝ラキアージュ。彼女の味方は、その後見人である宰相クレジオ伯。団長ルクシオ率いる近衛兵たち。元魔術師で家庭教師イルバード。そして優希。

たったこれだけしかいない。

他の貴族たちは忠誠を誓いながらも日和見をしている。どう転んでも自分に損がないように。

『仕方ありませんわ。彼らにも領地があります。守るべき民がいます。まあ、それ以外にも理由はありそうですけれど』

ラキアージュは苦笑した。智里は返す言葉を持たない。貴族や領地など接したこともない問題だ。

日本にだって領地問題はあるが、大変だなと思いながら、全然自分とはかけ離れた問題として認識していた。これではいけないなと思う。もっと視野を広げ知識を得なければ、手を貸すどころか足手まといにしかならない。

優希とラキアージュは場所を移し、ラキアの部屋のソファーに腰を下ろしている。さっきはなぜかキッチンだったらしい。

「ラキア様は狙われている」

イルバードの言葉に全員が頷く。

『ええ、ご存知の通りわたくしは今まで3度、命を狙われました。すべて手口は違います』

『最初は毒。夕食のスープに仕込まれたらしい。神経毒で、毒見役も口に含んだのが少量だったので後遺症もなかった』

優希が続きを引き取る。

2番目は半年に一度の城下市民へ顔見せの日。テラスからの帰り道、城内でボーガンが打たれた。その矢でラキアージュをかばった近衛兵が負傷したという。ラキアージュの顔が曇る。

３番目も毒だった。今度は水差しに入っていた。飲む前に必ず小魚の水槽に垂らすようにしているのだが、入れた途端小魚は動きを止めた。
「よくご無事で」
『ありがとう、チサト。でもわたくし、幼いころから毒には多少耐性をつけておりますの。少し口に含んだくらいではどうにもなりませんわ』
安心なさって、とラキアージュは笑顔を向ける。智里も笑うしかなかった。
『ユウキが来てからはまだ何も起こっておりませんの。名前だけでも効果はありましたわね』
『名前だけってなんだよ。おれがいるから』
また始まった。イルバードと智里が顔を見合わせると、画面の向こうでぐうう、とくぐもった音が響いた。
思わず画面を振り向くと、二人がお腹を押さえていた。ラキアージュは頬を赤くしている。
『ああ、そうだった。姉ちゃんに相談したいことがあったんだ』
「そういえば優希、何か焦ってたね」
どうしたのと智里が問うと、答えたのはラキアージュだった。
『チサトお姉様、ユウキったらわたくしが料理をすると言っているのに、聞かないんですわ』
「ラキア…あなたそんなこと言ったんですか」
優希は頭を押さえ、イルバードは顔が引きつっている。二人の反応が気になったが、とりあえず続きを促す。
「ええと、ラキアージュ様は料理をしたいんですか？皇女様なのに」
『ラキアと呼んでくださいませ、お姉様。皇女だから料理をしてはいけないなんて法律はこの国にはありませんのよ。外に出られないんですもの、料理くらいの息抜きはわたくしだってしたいですわ』
「それは、そうかも知れませんが」
お姉様はちょっと、と困惑する智里の言葉を聞こえなかった振り

をして、ラキアージュは続ける。
『それですのに、わたくしがナイフを握った瞬間、あっちに行けですわよ。ひどいですわ』
『だから、おまえは基本がなっていないだろ、基本が。人が教えるって言ってるのにそもそも聞かないのはおまえだろうが』
『わたくしにだって料理をしたことくらいありますもの。現にイル兄様にだって手料理をご馳走したことがありましてよ、そうでしょうお兄様！』
イルバードが凍った。智里はそう思った。答えの無いことが答えだった。優希は冷たい目でラキアージュを見ている。ラキアージュは泣きそうになっていた。
とりあえず空気を和らげなければ。
「ラキア様、弟の料理はお口に合いませんでしたか」
智里がおずおずと切り出すと、ラキアージュは慌てた。
『味は不自由ありませんでしたわ！シェフよりは美味しくはありませんけれど、温かいですし。だから、わたくしもそれくらいなら自分で作りたいと言っているのに』
そうか、毒の心配があるから毒見の間に冷めてしまうんだ。智里は本当に自分の世界とはかけ離れているのだと悲しくなった。話をして気持ちは通じ合えるのに、どうしてこんなに違うのだろう。
『だから、作りたいなら教えてやるって言ってるんだって。おれもそんなに得意じゃないけど、少なくとも食べられるものは作っただろ。食べれないものは入れてないし。あとはシェフのおっさんとか姉ちゃんにアドバイスもらってレパートリー増やすから』
何を入れたんだろうか。好奇心が疼いたが言葉には出さない。智里は彼らがラキアージュに対して取る態度の強硬さを理解した。
優希はため息をついた。
『ルークに作ってやりたいんだろ』
「ルーク？」
知らない名前が出たのでつい言葉に出すと、ラキアージュは面白

いように真っ赤になり、手で顔を覆ってしまった。
『コイツの好きなやつ。さっき言ったろ、近衛団長』
「ああ、そうだったのですか。わたしは実験台にされていたのですね」
イルバードの氷が解けた。爽やかな笑顔だが、目が全く笑っていない。ラキアージュはびくりと怯えた。新緑の瞳が潤む。
『ご、ごめんなさい』
智里は手を鳴らした。みんなの注目が集まる。
「まあまあ、そこまでにしましょう。ラキア様も料理を作りたいなら優希の作り方を見て、ゆっくり教えてもらってください。優希は勘は悪くないと思うので、上達は早いと思いますよ」
提案を聞いてラキアージュは素直に頷く。優希は頭を掻いた。
「優希はこれを相談したかったのね。料理の件はまた話しましょう。とりあえず二人とも何か食べてくださいね。イルバードさんは、いい加減根に持つのは止めてください。いい大人でしょう」
智里にため息混じりに言われて、イルバードは小さくなった。

二人は口々に礼を言って通信を切った。イルバードも懐中時計の蓋を閉める。智里は深く息をついてソファーに背を預けた。
「疲れましたか」
心配そうに尋ねるイルバードに苦笑をもらす。
「まさか、皇女様とお話するなんて思いませんでした。膝までつかれちゃいましたし。気さくな方で良かったです」
「あの方は、皇族としては変わっています。わたしや父のようにそこに惹かれるものもいれば、そこが気に食わないという者もいます」
「そう、なんでしょうね」
呟いて、ティーカップを手に取った。またもや冷めてしまっていた。
「私は、優希の力になれるでしょうか」

揺れる琥珀を見下ろして、言葉をこぼす。カップの中で頼りない顔が智里を見上げている。
心配だった。優希を取り戻すため何かしたくて協力を申し出た。だが、イルバードから教えてもらってはいるが、ウェルテスに関してはド素人だ。
智里は、ただの日本人で、平凡な社会人なのだ。日本の政治のことも一般的なこと以上はわからない。学生時代に覚えたことやニュース、いろいろな本を読んで得た知識しかない。そんな自分に一体何ができるんだろう。
「十分ですよ。チサトがいるから、ユウキはラキアにあれだけ言えたんです。いつもならラキアの勢いに飲まれてタジタジです」
イルバードの温かい笑顔に胸の奥が暖かくなった。気のせいか紅茶まで温かく感じる。それを飲んで、ちらりとイルバードを見た。
「その、残念でしたね」
問われた意味がわからず、イルバードは首をかしげる。智里は空になったカップを見て続けた。
「ラキア様に好きな方がいらっしゃって」
「なぜそれが残念なんですか？」
本当に不思議そうに問い返された。
「だって、イルバードさんはラキア様のことお好きでしょう」
「そうですね、従兄妹ですし。可愛い教え子ですが」
「従兄妹？」
二人で顔を見合わせる。途端、智里は理解した。羞恥で顔が赤くなる。イルバードは思わず噴出す。
「ルクシオのことも子供の頃からよく知っています。あの二人は子供の頃から想い合っていましたから。でも全然進展しないんですよねえ」
「ごめんなさい、変な想像をしてしまって！お茶淹れ直してきます」
立ち上がってキッチンへ駆けていく。その後姿を見て、イルバードは楽しそうに笑った。

平凡の向こう側　5

「ラキア様と従兄妹ということは、イルバードさんのお父様かお母様が」
「ええ、わたしの父が前皇の弟です」
おやつのプリンを食べながら、二人は話を始めた。
イルバードのリクエストで煎餅も置いてある。ウェルテスには米がないのでこのようなお菓子が珍しいらしい。先日職場でもらってきたものをあげたらとても感動して食べていた。今度はお萩を買ってきてあげようと智里は思った。
「息子のわたしが言うのもなんですが、父は変わり者です」
イルバードは言う。その顔に愛情が溢れていたので智里も微笑んだ。
「城下の民であった母と結婚するために皇位継承件を放棄し、皇族から伯爵へと下ったのです。ですから、その息子のわたしも継承権はありません」
妹と違い、お城勤めからは逃げられませんでしたが。イルバードは苦笑してそう付け加えた。
「妹さんがいるんですか」
「ええ、自由奔放すぎて１０年ほど前に家から抜け出したままです。今頃どこにいるのやら」
ため息をつくイルバードを智里は気の毒だなと思う。
「それは、心配ですよね」
兄弟姉妹がどこかへ行ってしまったのだ。イルバードの笑顔のその裏には心配が隠されているのかと思うと、智里は胸が重くなった。
「チサトは優しいですね。でもわたしは心配なんてしていませんよ」
「イルバードさん？」
イルバードは輝かしいほどの笑顔を浮かべている。その裏には本当に心配という文字はないようだ。あるのはむしろ、怒りの感情だ。

「ええ、心配などしません。あの妹ときたら行く先々で問題ばかり起こして、人の名前でツケで飲み食いあげくに借金まで。人が先手を打って検問を敷いたらそこをいきなり魔術で爆発ですよ。一個軍隊が壊滅ですよ。念のため対魔の鎧を着せていたので重傷者は出なかったものの、おかげで軍を辞めるものが後を絶たず人員不足で困っているんですよ。最終的には私の属を見張りにつけていたのを振り切って逃亡中です。ちょっとくらい人より魔術ができるからって馬鹿にして。誰が心配であるものですか」

「た、大変ですね」

「ええもう！」

壮絶な兄妹喧嘩中のようだ。この先、妹さんの話は振らないでおこうと智里は心に決めた。

「ええと、お母様もお城に？」

マグカップを逆さまにするようにしてお茶を飲んでいるイルバードに智里は話を振った。

「いえ、母は今頃領地の自宅で宿場でもやってるんじゃないでしょうかね」

「伯爵夫人が宿場・・・？」

「普通じゃないのはわかってるんですが、もともと城下で宿場を経営していましたから。働いてないとダメなんだそうです、母は。父もそんな母に惚れたらしく、母の言いなりです。わたし達には止められません」

「そうなんですか」

呆気にとられて智里は頷くしかなかった。変な人ばっかり。そう思ったことは懸命なことに口には出さなかった。

「そうなると、ラキア様の他に皇位継承権を持つ人はいないんですか？」

「そうですね、一応第二皇位継承者としてラキアの大叔父、つまり

前々皇の弟がいらっしゃいます。ですがこの方ではないでしょう。もう相当なお年ですし、配偶者はおろか後継者もいらっしゃいません」

ラキアージュ様の大叔父、子供なし。智里はノートに書き込む。後継者争いでの暗殺未遂というのが濃厚な線だと思ったのだが、そうではないのか。

「他に小説とかでありそうなのは、国がらみか怨恨かしら。イルバードさん、貴族の中で独立に否定的な人はいましたか？」

智里はノートの書き込みを見つめながら問いかけた。そこにはイルバードに書いてもらった地図がある。

三日月のような大地。その細くなっている右端にウェルテスはあった。

ウェルテスの東には高い山があり、北と南は海に面している。西は大国ローゼンスと小国2つに接していた。

地図で見れば小さな国。それがどれだけの犠牲を払って独立したのか、想像に難くない。

「特に・・・いや、いましたね。パドル公爵とリセッタ侯爵、この2人の領地は山側に面していたので、ローゼンスへ鉱石を輸出して儲けていたということです」

「ウェルテスは東の山から採れる鉱石の輸出で国益を出していたんでしたね」

「ええ、他国で取れないものが良く採れます。まあ、そのため2人は独立をしたらローゼンスへの輸出がストップしてしまうということで反対していたようですが、他の貴族の説得により肯定派になった、ということになっていました」

「なっていました、ということはその後に何かあったんですね」

「ええ。独立後、パドル公爵の密輸が発覚しました。ローゼンスへ結構な量が流れたようです。多少は回収できましたが。そして芋づる式にリセッタ卿と、独立肯定派の筆頭だったペール卿も国外追放になりました」

肯定派のトップも悪事に加担していたことに、智里は目を丸くする。
「三人はもともと手を組んでいたようですよ。というか、ペール卿がうまく二人を操ったというか。他の貴族に気取られないようにペール卿がうまく立ち回って、二人から賄賂をもらっていたようです」
「それは、なかなか賢い方だったんでしょうね」
智里は呆れてしまっていた。どこの国にも狡猾な人間はいるものなのか。
「国外追放といっても、他の貴族と繋がっていたらラキア様を狙うこともあるんじゃないでしょうか」
「それは大丈夫です」
ペンを動かす手をとめ、不安げに見上げる千里にイルバードは笑顔を向けた。
「妹にそれまでの借金を帳消しにしてやる代わりに、3人を懲らしめるよう言っておきましたから。今ではウェルテスに反抗しようなどという考えは持てないはずですよ」
イルバードの背後に黒いものを感じて、智里は顔を引きつらせた。そして心に浮かんだ言葉を飲み込んだ。
やっぱり妹さんと仲良しなんじゃないかしら。

『全然動きはないよー』
優希の肩が落ちている。
夕飯後、智里とイルバードはそのままリビングで定期報告を受けた。繋げた瞬間から優希は泣きそうになっていた。
『ていうか、今ほんとそれどころじゃないし。姫さんはあれだけ言ったのに相変わらず手を出そうとしてくるし』
どんどん愚痴になっていく。困ったものだと智里はため息を吐いた。
「ラキアはどうしてますか？」

『政務中。おじさんがついてるから大丈夫。ルークの部下もいるもん、な』
優希が後ろに話しかけると、画面の端にいた鎧がギシリと動いた。それに優希が手招きする。
「おや、ルクシオもいましたか。久しぶりですね」
ギクシャクと画面までやってきたルクシオは膝をついた。
『お久しぶりです、イルバディード様。お元気なようで安心致しました』
「ルークも元気そうですね。智里、こちらがルクシオ近衛団長です」
『んで、あっちがおれの姉ちゃん』
イルバードと優希がお互いの紹介をしてくれた。智里も頭を下げる。
「姉の智里です。優希がご迷惑おかけしているかと思いますが、よろしくお願いします」
『ルクシオ・トリステッドです。ルークとお呼びください。こちらこそ優希には良くしていただいています』
ぎこちなく頭を下げるルクシオに、イルバードが声をかけた。
「ルーク、傷の具合はいかがですか。まだ剣を握るのは痛むと思いますが」
『はい、もう大分良くなっています。実戦ではまだ動きは悪いと思いますが、部下に稽古をつけられるくらいには回復いたしました』
それはよかったとイルバードは笑って、智里へ説明した。
「ラキア様が矢に狙われた際、庇って怪我をしたのがルークなんです。掠めた矢にも毒が塗られていたため治りが遅いようで、今は優希の護衛をしてもらっています」
思わずルクシオを見ると、礼儀正しく頭を下げられた。それに優希がちょっかいを出して、ルクシオの顔が引きつった。その様子に笑って智里は言った。
「叩いちゃっていいですよ。優希は言っても聞かないから、私もいつもそうしてます」

かけられた一言に目を丸くして、ルクシオも笑った。その横では優希が姉ちゃん酷いと呟いていた。

『あれ、ていうか姉ちゃんたちどうしてリビングにいんの？母さんたちは？』

定期報告は常に優希の部屋で受けているため、不思議に思ったようだ。父も母もリビングにいることが多いので優希が不思議に思っても仕方がないのだが。

「ああ、浩次叔父さんがぎっくり腰やっちゃって。それの介護に二人で行っちゃったの」

『ぎっくり腰？』

「歩けないくらい酷いって言うから、今日は二人とも泊りがけだって」

『じゃ、じゃあもしかして今日は家に二人しかいない…？』

「そうなの。二人分しか食事を作らないなんて勝手が違って大変だったわよ」

苦笑して答えると、優希の顔が強張った。俯いて肩を震わせる。

『イルバード…』

「はい？」

『今すぐ外出ろ！帰ってくるな！』

顔を上げるとイルバードに吼えた。イルバードは困ったように智里を見た。

目が合ってしまって、なぜか智里の方が焦る。

「何言ってるのよ、いくら夏だってお客様を放り出すなんてできません！」

『けど姉ちゃん』

「けどじゃありません！あんただってラキア様によくしてもらってるでしょ！」

『だけど、イルバードだって男だぜ！？一つ屋根の下に男と女が二人きりなんて！』

優希に言われて智里の顔が赤く染まる。イルバードも赤くならずとも顔が引きつっている。
画面の向こうでは優希がルークに落ち着くよう諭されていた。
「そんなことあるわけないじゃない！イルバードさんに失礼でしょ！優希のバカ！」
立ち上がって手近なクッションを投げる。それは画面をすり抜けてテレビに当たって落ちた。
どうしようもなく恥ずかしくて、お風呂洗ってきますと駆け出した。

平凡の向こう側　6

必死に浴槽をこすっていると、気持ちが落ち着いてきた。
「優希があんなこと言うなんて思わなかったな」
智里だっていい大人だ。男と女の事は理解している。だが優希に言われるまで、イルバードと二人だからどうこうということは考えてなかった。
イルバードを信用している。それなのに、あんなに取り乱してしまった自分が恥ずかしかった。
「イルバードさんがそんなことするはずないものね。私、なんて自意識過剰なんだろう」
恥ずかしさでまた頬が赤くなっている気がする。スポンジを動かす手を止め、シャワーで泡を流す。冷たい水が手に気持ちよかった。
浴槽の壁から泡が水に押し流される。この変な感情も全部流れてしまえばいいのに。排水溝に吸い込まれていく泡を見ながら智里は思った。
「チサト？」
イルバードが呼んでいる。一瞬跳ねた鼓動を押しとどめて智里は返事をした。シャワーを止め、浴槽の水が切れるのを待って、栓を落とす。湯張りボタンを押すと振り向いた。
「ああ、もう終わりますか。手伝おうと思ったんですけど」
脱衣所からイルバードが見下ろしていた。
「いいですよ、お客様なんですから。またお茶でも淹れますからリビングで待っていてください」
「ではお湯を沸かしますね」
そう言うと、イルバードは何かに気がついたように智里へ手を伸ばした。触れそうになる瞬間、智里はびくりと身体を揺らした。イルバードが動きを止める。目が合った。

「そこ、泡がついてますよ」
笑顔で左の頬を指差して、イルバードは出口へ振り向いた。智里が指された頬に触れるとくしゃりと泡が弾けた。心臓がずくんと痛んだ。
やってしまった。
イルバードはこれを拭ってくれようとしただけだったのに。自分の気持ちが変なところにいっているから好意を受け取れなかったのだ。たとえ無意識な行動でも、相手には拒絶に思えただろう。
イルバードを傷つけた。智里は頬を拭うと、唇を噛んだ。

リビングに戻ると、ちょうどイルバードがお湯を沸かしている最中だった。智里はポットへ茶葉を入れる。あっさりがいいと思い、ダージリンにした。
「沸きましたよ」
笑顔のイルバードは変わりなく智里へ声をかけてくれる。智里も平静でいようと努力した。
「ありがとうございます。じゃあこの辺まで入れてもらっていいですか？」
「はい」
智里がポットの中ほどを指すと、イルバードはお湯を入れ始めた。
あまりにちょっとずつ入れるのでもう少し入れる量を増やしてもらおうかとイルバードを見上げると、イルバードの手が狂った。ポットの縁でお湯が跳ねた。
「熱っ」
ポットを指していた左手に少しかかる。思わず引っ込めると、イルバードの顔色が変わった。
「だ、大丈夫ですか！？」
「ちょっと、イルバードさん！？」
すぐ沸くと評判の電気ポットを置くと、智里の手をつかんでキッ

チンへ飛び込んだ。水を流しっぱなしにしてそこへ智里の手を突っ込む。
「痛くないですか？大丈夫ですか？すみません、跡が残らないといいんですけど…」
慌てているイルバードを見て、呆気にとられた。
「大丈夫ですよ、かかったのはほんの少しだけでしたし」
「いえ、いけません。ちゃんと冷やさないと。どんな小さな跡だって残してはいけません。智里の肌は綺麗なんですから」
さらりと言われて智里は赤くなった。今日はどれだけ赤面すればいいんだろう。
後ろから抱えられ左手を水に晒している。しっかりつかまれた左手が痛い。背中にイルバードの体温が伝わってきて、今更緊張した。軽く上を向くとすぐに真面目な表情のイルバードの顔がある。
それを嫌だとは思わなかった。
「チサト？」
間近で顔を見られているのがわかったのだろう。イルバードも顔を向けると視線が合った。
状況を思い出したのか、イルバードは智里から飛んで離れる。そして思い切り頭を下げた。
「すみません！チサト、あの、そういうつもりはなくて」
顔を上げたイルバードの眉毛を下がっている。しどろもどろで弁解するその様子が可笑しくて、智里は笑いをこらえられなかった。
声を上げて笑う智里を見て、イルバードも引きつった笑みを浮かべた。
「ありがとうございます、もう大丈夫です。十分冷えました。イルバードさんも冷えたでしょう？」
水を止め、右手で左手に触れると冷たくなっていた。タオルを差し出すと、イルバードも微笑んでくれた。
お湯の量が少なく渋くなってしまった紅茶は、甘いミルクティにすることにした。

湯気の立つカップを置いて智里が座ると、イルバードは困ったように切り出した。
「ユウキが謝っていました。思わず変なことを言ってしまったと」
「そうですか」
「はい…ユウキはチサトを大事に思っていますから」
「本人は認めないでしょうけど」
「そうですね」
顔を見合わせて笑う。
「私も優希に悪いことをしたとは思います。心配してくれたのにあんな態度をとってしまって」
組んだ自分の手を見下ろして智里は呟いた。しばらく黙って、やがて吹っ切れたように顔を上げた。
「まだまだ手のかかる弟だったから、あんなこと言われるとは思いませんでした。もう大人なんですよね」
「そうですね、ユウキはもう子供ではありません」
切なげに言う千里にイルバードは続けた。
「でも、まだまだ手のかかる弟ですよ。甘えさせてあげてください」
ミルクティを飲むイルバードを見つめ、智里は、はいと微笑んだ。

しばらく、黙ったままミルクティを飲んでいた。お互いが何か言うのかと、お互いが探っていた。
先に動いたのは智里だった。
飲み干したカップを少し雑にテーブルへ置く。それで勢いをつけて口を開いた。
「ええとですね」
声を出した方にイルバードは視線を動かす。しかし智里の視線は上がらない。
「弟が変なことを言ってすみません。私も変に気にしてすみません」

顔が熱いのに、指先は冷たい。手が震えないように、智里は必死にカップを握り締めた。
イルバードが一つ息を吐く。智里は肩を竦めた。ああ、呆れられただろうな。
「こちらこそ、すみませんでした。わたしも思わずユウキの言葉を気にしてしまいました。…チサトを怯えさせてしまって、正直自分に呆れました。チサトに嫌われたかと思いました」
本当に辛そうに聞こえて、智里は顔を上げた。否定しようと首を振るが、イルバードは腕で顔を隠していて見えなかった。わかってほしくて声を出す。
「すみません」
そんなつもりじゃなかった、などと言っても怯えてしまったことは覆せない。
またしょげてしまった智里に向き直り、イルバードは視線を合わせた。安心させるように微笑む。
「ユウキの言うとおりわたしも男です。ですが、立場や使命はわきまえています。だから、チサトも安心してください」
イルバードの笑顔から全てが伝わってくるような気がした。それだけで心が温かくなる。
智里は頷いた。
「はい。イルバードさんを信用してます。だからもう大丈夫です」
二人で長い息を吐く。緊張が解けたせいだ。顔を見合わせて笑った。
「しかし、ユウキには驚かされましたね」
「そうですね。男の子って誰でもああなのかしら」
「女性もそう変わらないと思いますが…」
「そうですか？」
「王城ではそうでしたね」
「そうなんですか。でも、イルバードさんがそんなことするはずがないのに」

先ほどの状況を全て笑い話にしてしまえとばかりに話し出す。
「イルバードさんはお兄さんみたいな感じですよね」
同意を求めると、イルバードは引きつった笑顔を浮かべていた。
「そうですね、お兄さんですよね…」
肩を落とすと、先にお風呂いただきますと席を立った。重い後姿を見ながら智里は首をかしげる。
片付けようとイルバードの使っていたカップを持ち上げた。今まで持っていたため、イルバードの温もりが残っていた。
「三歳年上だもん。お兄さん、よね」
ちくりと刺さった言葉には気付かない振りをした。

感情の向こう側　1

「篠崎さん、最近付き合い悪いですよね」
発注書に数字を書き込んでいると、背後から声がかかった。
「そんなことないと思うけど」
和田の言葉に、智里は振り向かずに答えた。とっとと発注書を終わらせてフロアに出ないと、残業しなければならなくなる。
「そんなことありますって。篠崎さん、ここのところ飲みに誘ってもすぐ断るじゃないですか」
「ここのところって行っても、ほんの1週間かそこらじゃない」
和田の視線を背中に受けて、智里は渋々振り向いた。

昨日は何事もなく夜が過ぎた。
朝ご飯を作っていると、母から電話がかかってきた。叔父のぎっくり腰は辛いようだったが、病院へ連れて行ったのでこれ以上泊まりこまなくても大丈夫だという。　2日に一度は母が顔を出して世話を焼くらしい。
「今日は夕方に帰るから。みんな出掛けるでしょ？みんなが帰ってくるまでには戻るわね」
イルさんにもごめんなさいねって伝えておいてね。母親はそう言って、智里が返事をする前に電話を切った。
「お母さんですか？」
「はい、今日の夕方に帰ってこれるそうです。叔父さんもそんなに具合悪くないようなので大丈夫だそうですよ」
そして智里は、午前は休講だというイルバードに後を託し仕事へ出てきたのだった。

智里は近所の大型書店で働いている。大学を出て、学んだ科目とは違っていたが思い切って応募してみたところなんとか受かった。それから3年、ただひたすら働いてきた。

和田は智里の下で働く後輩だ。大学生のアルバイトで、今は夏季休暇のため日中から仕事に入ってもらっている。

智里と同じときに入って、大学1年生から働き始めているから、今は3年目だ。智里の受け持つジャンルを一緒に管理している。同じ年数働いているため、智里も任せられる仕事は安心して和田に預けている。

そんな彼が在庫調査の手を止めて話を続けた。

「でも、普段なら誘ったらほとんど断らないのに、最近は悩む暇もなくすぐに断るじゃないですか。どうしてですか？」

「どうしてって」

智里はため息をついた。何を気にしているのか和田は不機嫌そうだ。その顔に智里はボールペンの先を向けた。

「言ったじゃない、ホームステイの人がいるからなるべく家を空けられないの。わかったらとっとと手を動かして」

この前確認したがやはり、みんなの記憶はやはり弟が留学へ行ったのと入れ替えに、イルバードがホームステイに来ていることになっていた。

上司である智里の命令には従わざるを得ず、和田は在庫棚にある本の数を数え始めた。それでも不満そうに口を尖らせている。

全く、何考えてるのかしら。手元の在庫表に数を書き込む部下を見ながら智里も思わず口を尖らせかけて、慌てて机に向き直る。ちらりと時計を見ると思ったより時間が過ぎていた。あと30分以内に書類を終わらせなければ後の業務に支障が出る。

「篠崎さん」

一枚紙を捲った所でまた和田から声がかかった。

「今度はなに？」
またこの出版社同じファックス流してる、資源の無駄だな。大きく斜線を引いてもう一枚捲った。
「気になる人、いるんじゃないんですか」
思わぬ言葉に思わず振り向くと、先ほどより真面目な顔をした和田がこちらを向いていた。焦った智里は笑いを浮かべた。
「な、何言ってるのよ」
和田が口を開こうとすると、スピーカーからレジの応援要請が流れた。二人で天井を見上げる。
「なんでもないです」
智里が何かを言うより早く、和田は一つ息を吐きパタンと在庫表を閉じて駆け出した。智里もペンを置き、その背中を追いかけた。

レジには従業員がたくさん集まり、もう智里が入る必要はないようだった。アルバイトの子と目を合わせて、智里は来た道を引き返した。
気になる人。
和田の言葉から、智里は金色を思い浮かべそうになって首を振る。今は優希の事だけ気にしていなければならない。
そう、気になる人は優希以外にいてはいけないのだ。
優希が無事に帰ってくるように。
歩きながら、ふと視線を横へ向けると、近くの棚が乱雑になっていた。読んだ人が雑に置いていったのだろう。いつものこととはいえ、ため息を隠しきれない。
智里は本を綺麗に直し、整えた棚を満足気に見て微笑む。
そして気付いた。

気になるのは優希のことだ。だが、それを気にしていてはいけないのだ。
たとえイルバードがいようと、智里は今まで通りに過ごさなけれ

ばいけなかったのだ。記憶変換してイルバードが来たならば、還るときも必ずそれが行われるはずだ。優希の代わりとしていた彼の記憶は、全てが優希として変わるだろう。

逆に言えば、優希が関係しないことは記憶変換は行われない可能性がある。今、こうして普段通りでなく智里が働いていることがそのまま記憶に残るかもしれない。

イルバードさんに確認しなくちゃ。その前に和田くんに飲み会の提案をした方がいいかな。

心で呟いて、智里は仕事の続きをするために事務所へ向かった。

感情の向こう側　2

家に帰ると、まだイルバードは帰っていなかった。
台所の母にお帰りなさいと声を掛けると、食事の支度の手を止めてこちらを振り向いた。
「浩次ったら、いい年した男が泣きそうになってるんだもの、面白かったわよー。しかも、ぎっくり腰の原因なんだと思う？」
「わかんないけど、包丁向けないでよね」
智里はティーポットに茶葉を入れながら呆れる。自分も部下に同じ事をしていたのは忘れたことにした。
母親は包丁を置いて、手を拭いた。
「呆れちゃうわよー。あれの原因って、くしゃみだって」
ちょっと休憩させてね。そう言ってダイニングの椅子に座った。
お湯の中で茶葉が舞って芳醇な香りが花開く。カップを取り出して母親の向かいに座った。
「意外といるみたいよ、そういう人。本当に帰ってきちゃって大丈夫だったの？」
「大丈夫よ。おじいちゃんもまだ元気そうだし、おばあちゃんも浩次の世話ができて喜んでたわよ」
そういうものなんだろうか、智里は少し考えたが母が言うんだから間違いではないだろう。
琥珀色の液体をカップに注ぎ、母に手渡してやる。嬉しそうに受け取って、カップから立ち上る香りを胸いっぱいに吸い込んでいた。
「やっと落ち着いたわ。智里の淹れる紅茶はやっぱりいいわね」
褒められてすこし胸がくすぐったい。智里は照れを隠すように、カップに小さく口をつけた。
「そうそう、昨日は大丈夫だった？」
「あっつ！」

熱湯が思い切り口に入ってしまった。舌がぴりぴりする。智里は相変わらず猫舌ね、と母は紅茶をすすった。
「大丈夫って…なにが？」
「ご飯とかは智里がいるから心配はしなかったんだけど、あなたちょっと前までイルさんを気にしてたでしょう。前は全然平気だったし、今もだいぶ平気になったみたいだけど」
大丈夫かなって。微笑む母は小首を傾げた。
その仕草は微笑ましいが、引っかかる言葉があった。
「まえ？」
「ええ、2年前だったかしら、前にイルさんが来たとき」
どういうことだろう、前回の召喚の記憶も一緒に置換されるものなのか。イルバードに聞くことはまだまだたくさんありそうだ。
内心焦りながらも、母の言葉に合わせて智里は苦笑した。
「ああそっか。うん、なんか久しぶり過ぎて忘れちゃったみたい。なんかごめんね」
「あら、謝るのはわたしじゃなくてイルさんにでしょう。あんなに懐いてたのに」
衝撃的な言葉が聞こえて智里は持ち上げたカップを傾けずに下ろした。眉を寄せて母を見る。
「懐いてた？」
「懐いてたわよー。出掛けるときは付き合ってあげたり、観光に連れて行ってあげようってガイドマップ買ったり」
そういえば、本棚にこの県の観光ガイドが挿してあった。なんで地元の観光ガイドがあるんだろうと不思議に思っていたが、そういうことだったのか。
だが、問題はそこではない。
「智里はイルさんが好きなのね」
思わず机に突っ伏しそうになった。母は他意なく言葉に出したのだろうけれど、今の智里にはダメージが大きすぎる。
笑顔で紅茶を飲み干す母をなんとなく苦い思いで見やり、智里は

ため息をついた。

『手配ができたら、おれはローゼンスの王子さんに会いに行くつもり』

定期報告では、いつもと違い優希は真面目な顔をしていた。隣に座るラキアージュも硬い顔をしている。

事態が進展したのだ。

優希は昼間、ふと思い立って独立戦争を勝利へと導いたあの「兵器」を一人で収納庫へ見に行った。

そこで襲われたのだ。

突然、天井の辺りから矢が放たれた。

幸いにも優希に怪我はなかった。兵器のメンテナンスをしていて、バリアが発動していたためだ。

バリアに跳ね返された矢は床に転がり、それを優希が目で追ったときにはもう侵入者の気配はなかったということだった。

『魔力充填、ちゃんとしてるんだな。助かったよ』

優希は苦笑するが、顔色は悪かった。一歩間違えれば怪我どころか、命が危なかったのだ。

『ユウキが狙われるなんて、わたくしの落ち度ですわ。チサト、ごめんなさい』

ラキアージュは悔しそうに唇を噛む。その彼女も顔色が悪い。

智里は口を噤んだまま微笑んだ。今口を開けばきっと、嫌な言葉しか出てこない。

『姫さんが狙われた方にはなかったが、今日はその矢に毒が塗られていた。ローゼンスの暗殺者がよく使う毒だ』

優希は常になく冷静だった。いや、いつもはわざとお茶らけているだけで、根は真面目なのだ。

智里は胸がつぶれる思いだった。こんなとき優希の傍にいれば抱きしめてあげられるのに。
今一番辛いのは確かに優希だが、危険な状況をただ見ているだけの智里もまた辛かった。
「一人で行くつもりですか」
イルバードの問いに、優希は首肯した。ラキアージュは眉をぎゅっと寄せたが、何も言わなかった。
「できるだけ、定期報告はしてください」
『わかってる。子機を持ってくし、今充電してもらってる。だから大丈夫だって。姉ちゃんも、そんな顔するなよ。たった1週間かそこらで帰って来れるよ』
ため息をついたイルバードに、優希は困ったように頭を掻いた。ラキアージュは少し笑顔を浮かべて、二人を見ている。
それらを見て智里は思う。
何が大丈夫だって言うのだろう。
優希はウェルテスの勇者だ。しかし、ローゼンスにとっては敵だ。もっとも憎い相手のはずだ。そんな中を一人で行くなど、無事で済むはずがない。誰もがわかっている。
しかし誰一人、優希を止める者はいない。誰も止められない。
智里はぐっと手を握りこんだ。やっとの思いで口を開く。余計なことを言わないように。
「気をつけてね」
『行ってきます、姉ちゃん』
優希はまだ青い顔に笑顔を浮かべて頷いた。
智里も微笑んだが、笑えているかわからなかった。

感情の向こう側　3

「止めないんですね」
イルバードは通信機の蓋を音を立てて閉めた。パチンと硬質な音に責められている気がして、智里は苦笑した。
「決めましたから。優希が決めたことに口は出さないって」
それが私にできる精一杯です。
それでも、空色の瞳に見られたくなくて視線を逸らした。
自分でも強がっていることはわかっている。手の震えが止まらない。慰められたくなくて、それを押さえようと両手を握り締めた。
イルバードも無理に視線を合わせようとせず、小さく息を吐いた。
「ユウキは兵器の子機を持っていくと言いました。それなら、多少は安心していいと思います」
乱雑のままの机から紙とペンを取り出すと、イルバードは何かを描き始めた。
「絵は得意ではないのですが、図の方がわかりやすいと思うので」
そう言って大きな城を描いた。簡略な絵だが、屋根の形など、ほんの少し日本の城に似ているようだ。
その下に大き目の四角を描く。
「これが、わたしたちが兵器と呼んでいるものです。誰もいつからあるのかは知りません。資料もありませんでした。そして、これを起動することができるのは、いまのところユウキしかいません」
「いまのところ、ですか？」
「わたしたちの世界の人間は、兵器に触れても何も起こらないのです。しかし、ユウキやこの世界の人が触れるだけで起動する。そのような兵器のようです。仕組みは全くわからないのですが」
イルバードは苦笑する。四角の周りに何人か人を描き、その人た

ちから兵器へ線を引いた。
「わたしたち魔術師が定期的にこの中へエネルギーを注いでいます。何種類かの属性のエネルギーを貯められるようです。そのエネルギーをこの」
大きな四角の横に人の大きさくらいの楕円を描く。
「制御盤で優希が発動します。様々な効果を発動させることができます。守りにも、攻撃にも」
城を大きく囲ったり、兵器から勢いよく外へ線を引っ張ったりした。
「発動は、入力盤で言葉を入力します。わたしたちの呪文を入力することでも、ユウキのイメージした言葉でも発現したそうです」
「なんだか、難しそうですね」
「ユウキは簡単だと言っていました。主に自分の言葉を入れていたようです。呪文はさっぱり覚えてくれなかったと言ってました」
智里は笑った。優希らしい。
四角から離れたところに人を描いて、小さい四角を持たせる。それをペン先で指した。
「これがユウキが言っていた子機です。そう、チサトの持っている携帯電話より少し大きいくらいですね」
「それも兵器なんですか？」
思わず机に置いておいた携帯電話を見る。智里は薄型を使っているため、これより少し大きいといってもかなり小型だろう。
「チサトの携帯電話のように、小さく入力盤がついています。小さいだけあって威力は劣ると思いますが、ローゼンスへの往復くらい、ユウキなら十分身を守れるでしょう」
イルバードはにこりと笑った。どうやら長々と説明してくれたのは智里を安心させるためだったようだ。好意に甘えて智里も肩の力を抜いた。

しばらくお互い黙っていた。
言葉が思いつかなかったわけではない。イルバードに質問することはたくさんあった。けれど、何か言葉を放つことで、居心地がよくて、温かくて、ほんの少し気まずい、この空気を壊したくなかったのかもしれない。
智里は、この瞬間何かをつかめそうな気がして、意識の手を伸ばした。
扉の向こう、廊下から軽い足音が聞こえた。母だろうか。
つかめそうだった形の無い何かは霧散した。
ノックされて、母の声が聞こえる。
「智里かイルバードさん、お風呂いかが？」
「はーい」
返事をすると、よろしくねと声を残して母は部屋の前を離れたようだ。先ほどと同じ、軽い足音が遠くなる。
「イルバードさん、お先にどうぞ」
「はい、じゃあお言葉に甘えて」
微笑むイルバードに笑みを返して、智里は立ち上がった。扉を開けようとして、少しためらってから振り向いた。
「あの」
智里の声に反応して、立ち上がろうとしていたイルバードが止まる。空色がこちらを向いた。
「イルバードさんが…優希が還って来るときは、また記憶変換というのが行われるわけですよね」
「はい、そうですが」
イルバードは智里を見上げている。何を聞きたいのかと不思議そうだ。蛍光灯の光に輝く金髪がやけに目に付いた。
「イルバードさんがいたことは、優希に代わるわけですよね」
「はい、その通りです」
「じゃあ、イルバードさんと関係ないことは、変換されないわけですよね」

少し考えて、イルバードは頷いた。
「本当に関係ない部分は、おそらくそうなりますね」
どうしたんですかと問いかけるイルバードに答えようと、智里は口を開いた。だが言葉が出てこなかった。なんと言っていいかわからなかった。自分の気持ちが形にならない。
「チサト？」
イルバードが立ち上がろうとする。智里は何も言えずノブに力を入れた。
扉の隙間から生温い風が流れてきた。今日も寝苦しいかもしれない。
大きく扉を開けて、少し息を吸った。智里は笑顔を作った。
「ちょっとした確認です。ありがとうございます」
それだけ言ってすぐに背を向けた。向かい側にある自分の部屋の扉を開ける。
「お風呂出たら教えてくださいね」
金髪が揺れる前に、扉を閉めた。

扉を閉めた勢いのままベッドに寝転んだ。枕元においてある目覚まし時計を見る。１１時を回っている。一定のリズムを刻むその音に耳を澄ませて目を閉じた。
落ち着くまでそうしておいて、なんでこんなに気持ちが落ち着かないのかわからなかったが、手の届くところに置いてあった鞄を開けた。
無料クーポン誌を取り出して広げる。適当に目星をつけると、携帯電話を開いた。
「明日、ここで、いいですかっと」
メールに必要事項を詰め込んで、送信ボタンを押す。あとは返事待ちだ。携帯電話と雑誌を無造作に押しやって、智里は枕に顔を埋めた。

今日、約束などしてこなければよかった。体調不良ということでやっぱりキャンセルしてしまおうか。現に、鉛でも飲み込んだように胃の辺りが重い。頭もずきずきする。

優希が心配なのに、どうして自分の日常を考えなければならないのだ。

くぐもった唸り声を上げ、それだけでは収まらなくて枕に拳を振り下ろした。

感情の向こう側　4

硬質な音が聞こえて、智里はぼんやりと目を開けた。枕元の時計を見ると、最後に見てから30分ほど進んでいた。

目の端に光を捉えて、視線を向ける。携帯電話の着信ランプだった。

返事かな、いつ来たんだろう。

「チサト、お風呂出ましたよ」

携帯電話に手を伸ばすより早く、扉の向こうからイルバードの声が聞こえた。頭が重くて、ただ扉を見ているともう一度ノックされた。

「チサト、寝てるんですか？」

「いえ、いま入ります」

何とか返事をして、智里は身体を起こした。

「あとはチサトだけだそうですから、ゆっくりどうぞ。おやすみなさい」

微笑んでいるだろうイルバードの足音が聞こえる。向かいの扉を閉めた音がした。

その音が止むまで扉を見ていた智里は、スッキリさせたくて頭を振った。しかし、明瞭になるどころか痛みが生じただけだった。

息を飲み込んでこめかみを押さえた。ずくんずくんと血の流れる音が頭の中に反響する。その音と痛みが小さくなると、智里は詰めていた息をゆっくりと吐いた。

こんなにひどい頭痛なんて久しぶりだ。智里は健康優良児で、貧血もほとんどしない。

精神的なものかしら。

ベッドから降りると、携帯電話に手を伸ばした。画面を開くと、やはり先ほど送ったメールの返信だ。

快い返事が並んでいる。キラキラしたデコレーションにため息をついた。
智里は何かを吐き出すように、指を動かした。

「イルバードさん、まだ起きてますか」
ノックはせずに扉に声をかけた。
もう12時を回っている。寝ていればそれでいい。
今から伝える内容に対して、イルバードの反応を見るのが怖かった。言わなければそれでいいのかもしれない。知らせなければイルバードは普通のままでいるだろう。
だが、言わないままでは多分智里が今まで通りでいられない。
それでもこのままイルバードが寝ていてくれれば伝えられなかったということで智里の心は軽くなるかもしれない。
様々な可能性を考えて、智里は扉の前に立っていた。
だからどうか、寝ていて。
その願いはカタリとノブの回る音で崩れた。
「チサト？どうかしましたか」
不思議そうに扉を開けたイルバードを見て、なぜかホッとした。
「チサト？なにかありましたか」
お風呂上りの格好のまま立ったまま何も言わない智里をイルバードは心配そうに見る。
「飲み会」
智里の放った単語に、金髪が揺れる。空色の瞳が怪訝そうに細められた。
それを受け止めて智里は微笑んだ。
「飲み会に行くんです、明日。だから帰ってくるの遅くなります」
口角が落ちないように必死に引き上げる。顔の筋肉をこんなに気にすることは仕事でも滅多にない。
イルバードの目がさらに細められた。

「そうですか、楽しんできてくださいね」
にこりと微笑む顔が見下ろした。声も常と変わらない。少し寂しそうな声音だったかもしれない。それでも、智里が想像していた反応は返ってこなかった。
智里は口角を持ち上げたまま、内心で戸惑っていた。イルバードがあまりにも普通なので、今まで緊張してた気持ちをどうしていいかわからない。
「ええと、怒らないんですか？」
引きつる頬を傾ける。イルバードも首を傾げた。
「どうして怒るんですか？楽しそうでいいですね」
「だって、優希がいま大変なのに」
思わず眉を寄せると、イルバードは合点がいったというように微笑んだ。
「ユウキのことを気にしていたのですね」
智里は俯いた。イルバードは手を持ち上げて、一瞬空中で止めて、自分の髪を梳いた。
「それは確かに気になりますが、チサトにも生活があるでしょう。ユウキだってそのことはわかっていると思いますよ」
先ほどの質問もそういうことだったんですね。イルバードの言葉が振ってきて、智里は顔をしかめた。
「しょうがないんです、チサトは自分の生活を大事にしなければいけないんです」
「でも…」
「しょうがないんですよ」
口調は優しいが、声は有無を言わせなかった。それでも答えを返さない智里にイルバードは小さく息を吐いた。もう一度、しょうがないんですと優しい声で言った。
膝を落として智里の顔を覗き込もうとするイルバードに、智里は恥ずかしくなった。これでは自分が駄々っ子のようだ。
「気にするなとは言えませんが、ユウキを信頼してあげてください。

大丈夫です。ユウキは必ず無事で帰ってきます」
目からウロコが落ちるようだった。呆然とイルバードの顔を見る。
自分は優希を信頼していなかったのだろうか。ついこの間、優希を大人になったと認識したはずなのに、また幼い子供のように思っていなかっただろうか。
優希は既に危険な世界を経験している。そのときにだって命の危険はあっただろう。そのときは戦争中だったのだし、むしろ今より格段に危険だったのではないだろうか。それでも無事に帰ってきているのだ。智里はその結果を信用してあげなければいけない。
本当に自分が情けない。イルバードだって心配でないわけないのに、こんなに落ち着いているではないか。
「大丈夫ですか」
呆然としていた千里が唇を噛み締めているのを見て、イルバードは心配そうに声をかけた。
その声で智里は自分の思考から浮上した。切れるまでは行かなかったが、唇は赤く腫れていそうだ。深呼吸をしてイルバードの顔を真っ直ぐに見ると、空色はしっかりと見返した。それが緩く細められる。
「大丈夫です。相変わらずごめんなさい」
思わず苦笑した。いつも智里は謝っている気がする。
「自分の生活、大切にします。明日もし優希から連絡あったら教えてください」
家の電話はリビングにあるからダメだとして。
「優希の携帯電話使ってください。机の上になかったら鞄の中かもしれません。充電の仕方はわかりますよね」
「ええと、いやあの」
「非常事態ですから、優希に何を言われたって使ってください」
言葉を濁らせるイルバードに、喋る勢いのまま一歩を近づいた。
イルバードがしゃがんでいたため意外に顔が近くなったことに驚いた。

「わ、私が許可したと言えば大丈夫です」
魔術師は一歩下がって背筋を伸ばした。それにつられて智里は顔を上げる。
「前にも試してみたんですが、そういったものと相性が悪いようで、わたしが触ると圏外になってしまったり、動かなくなってしまったりしてしまって…使えないんです」
すみませんと謝る顔には情けない笑顔が浮かんでいた。

感情の向こう側　5

乾杯の合図でみんながグラスを合わせる。涼しい音が座敷に広がった。

「しっかし、うちの連中は飲み会好きねえ。誘われたのなんて昨日なのに、半分くらいいるじゃない」

ビアグラスの半分まで一気に飲み干して美知子が口を拭った。オジサンのように声を出したことは見て見ぬ振りをしてあげた。

「みんなお祭り好きだからね。まあそういう美知子さんだって昨日の今日で参加してくれたけど」

笑うと、隣のテーブルに座っている大学生たちを見た。もう次を注文している。思わず眉を寄せると、美知子も笑った。

「智里姐さんの出番じゃない？」

「もう、やめてよ。あれはちょっと勢いがついちゃっただけなんだから。…未成年と車の人はソフトドリンクのみ。破った人は次はないよって言ってきてくれる？」

前半は美知子へ、中間は同席の人たちと、後半は和田にお願いする。和田は素直に頷いて席を立った。美知子はそれでも意地悪く笑う。

「あれでもうみんな悪ふざけはしなくなったんだから、結果オーライってやつじゃない」

「ビジネス担当が言ってやってよ、法律専門でしょ」

「売り上げには貢献するけど、今のところ中身に興味は湧かないのよ。あたしは顔より中身なんだけどねえ、どうにもこうにもうちの棚はオヤジくさくって」

萌え系はあたしのキャラじゃないし、おにいさーん、おかわり。残り半分を飲み干して、まだ大学生たちのところにいた店員へ、美知子は大声を出した。

「それでどうしたよ」

お通しのえびせんをつまみながら、智里へ視線を向ける。何のことかと首を傾げると、美知子は顎を杓った。
「ワンコをお使いに出すなんて、珍しいじゃない」
「ああ…」
美知子は、智里のサポートで一生懸命に働いている和田のことをワンコと呼んでいるのだ。理由を聞いたことはあるのだが、犬っぽいからとだけしか言わない。背も高いし、どう見ても犬っぽくない。そう反論しても、美知子は妖艶に笑うだけでそれ以外を言うことはなかった。
和田は智里の言葉を伝えに言ったまま大学生たちに捕まってしまった。そもそも和田が大学生なのだから、当然だろう。
ちらりと同席の人を見ると、どうやらテレビの話で盛り上がっているようだった。「昨日さ、気になる人いるんじゃないかって言われた」
「は？」
泡の無くなってきた液体を口の前に掲げ、聞こえないように早口で呟いた。
「気になる人、ねえ」
しっかり聞こえていた。美知子はえびせんの油がついた手を手拭いで拭いながら、和田を見ている。
「まあ、ワンコも気が急いちゃっただけでしょ。あんたのブラコン知ってたら焦る必要なんて…」
「ブラコンって、ひどいわね」
うろんな目をしている友人に苦笑する。
確かに今現在はブラコンと呼ばれても仕方がないかもしれないが、美知子はいつも大げさに取りすぎだ。そう言うと鼻で笑われた。
「和田くんにあんなこと言われるなんてさ、上司としてどうかと思って」
「それは関係ないんじゃないの？」
半分以上残っているビールを傾ける。炭酸が喉に染みた。

「…仕事できてないとか思われてるよね、絶対。確かにたまにボーっとしてたかもしれないけど、ちゃんとやってるのに」
むかむかと怒りが込み上げてきて、やっぱり一瞬浮かぶ金色を消したくて、残りを一気飲みした。苦味が舌の奥で弾ける。
「あー、前言撤回するわ。ワンコはもっと焦るべきね」
とりあえず飲もう、飲もう。そう言って、美知子は店員に運ばれてきたビールを掴んで、智里の分もおかわりを頼んだ。

頭がグラグラして、目が霞んでいるようによく見えない。ただ、眠い。
「篠崎さん、しっかりしてください」
誰かが自分を支えて歩かせてくれているようだ。ありがとう、と言ったけれど自分の声が頭の中で反響していてよく聞こえなかった。
「ちょっと、ここで座っていてください。飲み物買ってきますから」
返事をするのも億劫だったのでベンチに腰を下ろすと、人影は近くの自動販売機に駆けていった。
目を閉じるとうっかり記憶がなくなりそうになる。そうならないように頑張って目を開くと、そこは公園だった。
「ここ……」
「あ、目が覚めました？よかった」
「わだくん……」
声の方を向くと、和田がいた。水を差し出されて受け取る。冷たくて気持ちがよかった。
「ここの近くでしたよね、篠崎さんの家。迷うかと思って焦りましたよ。聞いてもよく分かんないこと言われるし。どれくらい飲んだんですか」
隣に座った和田はくすくすと笑って自分の分の水を飲んだ。
辺りを見回すと、和田の言ったとおり家の側の公園だった。智里ももらった水を少しずつ飲む。喉を通る清涼感が心地いい。

「悪かったわね、酔っ払いで」
半分ほど飲み干すと、少し酔いが醒めた。話す言葉も少しはっきりした。
「そういえば、美知子さんは？」
ついさっきまで横にいたと思ったが、いつの間にか和田に変わっている。和田はきょとんとした顔をすると、困ったように笑った。
「片山さんは2件目に行きました。俺と変わったのは結構前でしたけど、気がつかなかったんですね」
「ごめん。……だけど、美知子さん明日早番だったと思うんだけど」
「パワフルですよね」
言葉は返さずただ苦笑した。
「篠崎さんは、珍しいですね」
酔っ払うの。和田も苦笑する。
「もしかして、昨日の、なんか気にしちゃいました？」
「え？」
笑みの形を作ったまま和田は視線を手に向ける。手に持っているペットボトルを揺らした。
「あ、いやその」
思わず言葉を捜すけれど、美知子に言ったようにはスラスラ出てこない。
和田は黙ったままだ。何か言わなくてはいけない。
「私、仕事もっとちゃんとするから。和田君になるべく迷惑かけないようにする…もういま迷惑かけてるけれど」
もっと先輩らしいことを言いたかったが、出てきたのはこんな子供のような言葉だった。せめて今、酔っていなければもう少しマシに聞こえたかもしれない。
隣から静かに笑う声が聞こえる。恥ずかしくて残りの水を飲み干した。柔らかいプラスチックが手の中でくしゃりと歪む。吹き抜ける風は生暖かいけれど、それ以上に熱い頬にはちょうどいい。
「いいです、篠崎さんはちゃんと仕事してますよ。そのままで大丈

夫です」
後輩からの言葉が嬉しい。お世辞も入っているだろうが、それでも嬉しかった。
智里は立ち上がる。少し胃が重たいし、頭も痛くなりそうだけれど、もう一人で歩けそうだ。
和田を見下ろすと、端正な顔がこちらを向いた。
「ありがとう。ここまでいいよ、もうすぐそこだから」
公園から見える家を指すと、和田も立ち上がる。今度は見下ろされた。
イルバードさんよりは低いんだ。そんなことをふと思って、心臓が小さく跳ねた。
「そうですね。あれが、留学生さんですか？」
「え？」
頭の中を覗かれたのかと思って驚いた。和田が指差す方を振り向くと、家の前に金髪が見えた。
イルバードがこちらを向いていた。表情までは見えないが、驚いているような気がした。
「今度、紹介してくださいね。今日は楽しかったです。それじゃあ、また明日」
「え？」
手の中から空になったペットボトルを取り上げられ、智里が振り向いたときには和田はもう背中を向けていた。
「あの、送ってくれてありがとう」
去っていく後姿に声をかけると、後輩は少し振り向いて会釈した。
智里は手を振る。後姿の後輩には見えないだろうけれど。
なぜだか胸の奥が痛かった。

感情の向こう側　6

「チサト、今の方は？」
その場に立って小さくなった後姿を見送っていたら、声をかけられた。智里が一人になったから気になってやってきたのだろう。
「かわいい後輩です。それより、イルバードさんこそ外に出てきて、どうしたんですか？」
振り向いて顔を見上げる。イルバードは少し眉を寄せてなんだか機嫌の悪そうな顔をしていた。
遅くなったから怒られるかしら。
もうそろそろ日付も変わる時間だろう。人通りもなくなって久しい。智里が遅いから迎えに来たのだろうか。電話も使えないのに単身出てくるとは有難いのか迷惑なのか判断し辛い。
イルバードはいま気付いたように目を開いた。
「そう、そうです。優希から連絡がありまして」
「優希から？」
ふわふわしていた気分も飛んでいった。勢い込んで近づくと、イルバードは一歩下がった。
「あ、お酒臭いですか！すみません」
それどころじゃないような気もするが、お酒の匂いは飲んでない人には結構臭うものだ。恥ずかしいやら申し訳ないやらでイルバードから離れた。
「いえ、そういうことではなくて、そんなことはなくもないですが、大丈夫です」
なぜかあたふたしていてよく分からないが、否定しきれていないイルバードにすみませんと呟いた。
「とりあえず、家に入りましょう。何か飲めばマシになるのでしょ

う？」
「ハイ…」
もう一度すみませんと呟いて頭を落とした。

玄関をくぐると、まだリビングに明かりがついていた。
「智里、お帰り」
「ただいま、お父さん」
リビングを覗き込むと、父がこちらを振り向いた。母はもう寝室に行ったのだろうか。
手を洗いに行こうかと鞄を下ろすと、父に呼び止められた。もうパジャマに着替えているところをみると、あとは寝るだけなのだろう。
智里は苦い顔をしてその場に正座した。大抵こういうときは怒られるかお説教だからだ。
「そう怖がられても困るんだがな。智里はもういい大人だし、楽しいのはわかるが、ほどほどにしておきなさい。母さんが心配するから」
思わず神妙にした智里に苦笑して、父はテレビを消した。席を立つと寝室へと向かう。おやすみと小さい声が聞こえた。
「おやすみなさい」
智里もその後姿をへ声をかける。久しぶりにちゃんと見るその後姿は少し小さくなった気がした。
洗面所で手を洗って帰ってくると、イルバードはすでにソファに座っていた。コップが2つ用意されていた。礼を言ってその前に座ると、ほんのりと温かかった。
ここ、お父さんが座ってたのか。
きっと、ずっと座って智里を待っていたのだろう。なんだか切ない気持ちが込みあがってきて、困惑した。思わず眉を寄せると、イルバードが笑う。

「お父さんも心配していたんですよ。ずっと黙ってつまらなそうにニュースを見てました。半分は頭に入ってなかったんじゃないでしょうか」
「そうですか…」
眉を寄せたままコップを手に取ると、透明の液体が入っていた。イルバードを見ると、にこりと微笑む。
「水です。お父さんから聞きました。お酒を飲んだ後には水をたくさん飲むといいそうですね」
「ええ、まあ。そうですけど」
「わたしも心配していたんですよ、チサト。だから、それ、飲んでください」
笑わない目で微笑むイルバードに肩をすくめて、智里はコップに口をつけた。

ユウキからの報告ですが、そう前置きしてイルバードは話し出した。夜のリビングに小さい声が響く。
「無事にローゼンスに着いたそうです。今頃は宿でゆっくりしているんじゃないでしょうか」
「あれ、でも確か1週間くらいかかるって」
昨日のイルバードの説明ではそうだった。頭の上に疑問符が浮いているのを見て取って、イルバードが頷く。
「ええ、通常ではそのくらいかかります。今回すぐに街に着いたのは、うちの妹が協力を申し出たからということでした」
渋い顔をして大きくため息をつくイルバードに、智里は首を傾げる。
「妹さん、ですか。確か旅をしているすごい魔術師なんですよね」
一応、イルバードさんとは仲が悪い。そう胸の中で付け足す。
「そうです。旅をしているというか逃げ回っているだけですが。まあ、その妹がユウキをローゼンスまで転移術で運んでくれたそうで

すよ」
　すごい魔術師かどうかはわかりませんが、暗い顔で笑うイルバードに、智里は苦笑した。
「妹さんにお礼を言わなくちゃいけませんね。優希を無事に連れて行ってくれてありがとうございますって。今は優希と一緒にいるんですか？」
「はい、優希と共に行動しています。お礼はいらないと思いますよ。とりあえず、優希の護衛として王宮が一時契約を結んだということですから。お金欲しさに護衛を買って出たのでしょう。そろそろ資金が底をつくころでしょうから」
　口座を一時停止してきて正解でした。そう言うイルバードに智里は微笑んだ。
「それでも、優希を護衛してくれるんですから、ぜひお礼を言わせてくださいね。妹さんって、イルバードさんと同じくらいすごい魔術師さんなんですよね。それなら優希を任せても安心ですね」
　微笑む智里に、イルバードは少し黙って座りなおして言った。
「チサトがそういうのなら、機会があればお願いします。妹も喜ぶでしょう。無鉄砲なところはありますが、優希はあいつに任せておけば大丈夫です。…兄として保証します」
　真面目な顔をしていはいるが、妹を智里に褒められ照れたのかイルバードの頬がほんのりと赤くなっている。あれだけ冷たいことを言っていても、根っこでは妹のことを認めているのだ。
　けんかするほど仲が良い兄妹なのだろう。
　イルバードのその様子を見て、智里は笑みを深くした。
「なんだか、ほっとしました」
　あくびをかみ殺して背もたれに体重を預けると、どっと眠気が押し寄せてきた。まぶたが自然と落ちる。
　明日は朝から仕事だから、もうベッドに入らないと。そう思っても、体が動かない。
「チサト、…？」

幽かに聞こえるイルバードの声に、はいと答えた。
智里の意識が暗闇に沈んでいく。何かが頬に触れた気がした。

無機質な音が耳に障って、眉を寄せる。手を思い切り振り下ろすと、いつも通りの衝撃が来て音が止む。
うっすら目を明けると、朝日がカーテンをすり抜けている。眩しさに目をしばたたせる。
重たい頭を持ち上げ目の前に迫っている文字盤を確認した。7時。いつも通りの時間だ。
「あー…」
昨日寝るのが遅かったので、寝不足だ。まだ寝たいと訴える体を叩き起こして布団から飛び出す。こういうとき社会人の辛さを地味に感じる。
一つ伸びをして深呼吸をした。そこでふと思った。
私、いつ布団に入った？
そう、昨日はリビングでイルバードと話をした。その後の記憶がない。
身体を見下ろすと、洋服は昨日のままだ。
「もしかして…」
イルバードが運んだのだろうか。
思わず部屋の中を見渡す。特に変なものは置いてない。部屋はなんとか片付いている。これならまだ見られても大丈夫だ。
ほうと胸を撫で下ろした。情けないやら恥ずかしいやらで頭が痛い。昨日飲みすぎたせいかもしれないが。
「とりあえずお風呂入ろう…」
落ち込みつつ着替えを持って扉を開けた。廊下に出ると、向かいの扉が開いた。背の高い金髪が部屋から出てくる。
「おはようございます」

目を合わせづらいが、何とか堪えて笑顔を向けた。昨日のことは忘れてくれるといいのだけれど。
イルバードは智里に気付くと、顔を強張らせた。
「イルバードさん？」
「おはようございます、チサト」
強張った顔を無理やり笑顔にすると、イルバードは挨拶を返すと、ぎこちなく階段を下りていく。
その後姿を見下ろしながら、智里は顔を引きつらせる。
私、何したのかしら。

画面の向こう側　1

『話をしてきた。ローゼンスは白だ』
優希から連絡が来たのは、翌々日のことだった。
画面の向こうはもう薄暗く、端に写る窓の外からは人の声が絶え間なく聞こえていた。
空の色も変わらないんだ。優希の報告を聞きながら智里は思う。
空の色も、人の温もりも、何も変わらない。それであって、こんなにも隔てられている世界だと改めて感じた。
「そうですか。となると、犯人はいったい…」
『それなんだけど、王子さんからいい情報がもらえたよ』
優希の言葉にイルバードが眉を上げる。その様子に優希が苦笑した。
『大丈夫、あの人は信用できるよ。ちゃんと自分の足で立ってる。心配すんなって』
「それは、そうかもしれませんが」
どうやら、敵国の情報を素直に信じることに抵抗があるようだ。それをわかっているから、先ほどのイルバードの様子に、優希は苦笑したのだろう。
『あの人の進む道はラキアによく似てるよ。うまくやれば協力し合えると思う』
時間はかかると思うけどさ。付け足された言葉にイルバードはため息をついた。
「…それで、その情報とは」
眉は寄せているものの、優希の言葉を理解しているのだろう。あとは気持ちの問題なのだ。
優希は少し笑って真面目な顔になった。

『今回の、おれを襲った犯人は、おそらくマリの妹だ』

「マリ…？」

聞きなれない名前を智里は繰り返した。

その呟きを聞いて、イルバードはぎこちなく智里を向く。何かを言おうとして口を開くが、何を言うか迷っているように口を開閉している。

優希はしばらく目を閉じた後、そっと言った。

『姉ちゃん。マリは』

「ユウキ」

口をはさんだイルバードに、おれが言うと優希は首を振る。

『マリは、前の戦いのとき、おれと姫さんを庇って死んだ人だ』

それだけ言うと、優希は再び目を閉じた。その人を悼むように。

「え…」

智里がイルバードを見るが、視線を外して目を伏せている。

言葉が出てこない。何を考えたのかもわからない。

ただ智里の頭に浮かんだのは、きっと優希はその人のことを大切に思っていたのだろうということ。それだけだった。

『だから、狙われるのは仕方がないんだよ。おれが殺したようなもんだから』

「ユウキ！それは！」

『本当のことだろ。少なくともおれも、マリの妹もそう思ってる』

「優希…」

姉に名前を呼ばれて、優希は笑う。

『大丈夫だよ、姉ちゃん。もう気持ちの整理はついてるし。あとはさ、マリの妹とどう決着をつけるかだよ』

「でも優希、危ないことは」

『もちろん、しないよ。痛いのは嫌だし。なるべく穏便に済ますようにするよ。心配すんなって』

こんな時名前を呼ぶしか出来ない自分が悔しい。だが智里の心配をよそに、優希は明るくからからと笑っている。それが余計に智里の心配を煽るのだというのに。

苦しそうに優希を見る智里に、イルバードは首を振って見せた。そしてため息をついて口を開く。

「で、そのマリの妹という者の居場所はわかっているのですか」

イルバードの言葉に優希は頭を掻いてまた笑う。

『それがさ、所在不明なんだってさ。さすがにもうウェルテスからは出ているだろうし、ローゼンスに戻ってるかと思って聞いてみたけど王子さんもさすがにわかんないって。宿とか食堂でも聞いてるけど、似顔絵もないし困ってるんだよな』

笑う優希にイルバードは更に大きなため息をついた。智里も小さく息を吐いて、画面を見渡した。首を傾げる。

「優希、ずっと気になってたんだけど、イルバードさんの妹さんは近くにいないの？」

『ん？ポニーはローゼンスに着いてからずっと別行動だよ。権力者は苦手とか言ってたけど』

「ポニーさん？」

「別行動ですか…」

『念のため城門まではついて来てくれたけどな。まあおれも面は割れてないし、なんともなかったから良かったけど』

「権力者が苦手ですか…」

隣から冷気が流れてきて、智里は宥めようと手を伸ばした。その手が届く前に、イルバードは座り直して顔を優希に向けた。

「まあ、ユウキが無事なのでいいとしましょう。今もどこにいるかわからないんですか」

今、避けられたのかしら。

昨日、あの飲み会の次の日から、イルバードが智里に対してやけにぎこちなくなっている。少しでも触れるのを避けているようだ。

私、本当に何をしたのかしら。…嫌われちゃったのかな。

組んだ手を見下ろす。辿り着かなかった手がやけに冷たく感じた。
『明日の朝に出発するから、今日はもう戻ってくると思うけど。なんか伝言ある？』
「あの…」
「給料は三割減で、と」
お礼を、と言おうとした智里を遮って、イルバードが口を挟む。怒りを抑えられないようだ。
バン、と重い音がして、誰かが走ってくる音がした。
『ちょっと！』
『うわ！おまえ何いきなり入って来てんだよ』
優希が驚いて声を上げると共に、画面に女性の顔がアップで映った。
高い位置で括った、透明感のある金髪がさらりと流れる。海のように深い青がイルバードを睨みつけた。
『うるさい！それより三割減てなんなのよ！お兄様に言われる筋合いないんだけど！』
「兄に向かってうるさいとはなんですか、ポニー！口の利き方に気をつけなさいと何度言ったらわかるんですか」
立ち上がって画面に怒鳴るイルバードに、智里は目を丸くした。優希は額を押さえている。
「ポニーさん？」
『うん、そう。イルの妹』
確かに、顔のつくりや髪の色は似ている。だが全体的にイルバードより明るい印象だ。それはきっと彼女の内から出る魅力なのだろう。
騒がしい兄妹の横で智里は弟に尋ねる。優希の呆れ具合からして顔を合わすたびにこうなのだろう。イルバード一人でもそうとうなものだったから、予想できたこととはいえ、実際に目にすると呆気に取られるものだった。
お礼、しばらく言えないわね。智里も小さくため息をついた。

「対象の傍を離れて何が護衛ですか！そんな中途半端な仕事しか出来ないなら三割どころか五割減らされても文句は言えないでしょう」
『あら、心外ね。お兄様よりちゃんと仕事はしてるわ』
ほら、入りなさい。そう言って手を引いた。その手には光る糸が握られている。小さく女性の悲鳴が聞こえた。
ポニーはイルバードを横目で見てにやりと笑う。そして言った。
『マリの妹、アンよ』

画面の向こう側　2

その少女は獣のようだった。
日に焼け、幼さの残る頬は表情を無くし、銅褐色の髪は何日櫛を通していないのか絡まってしまっている。破けた袖から見える細い腕には擦り傷や切り傷が浮かんでいた。
そして、猛禽類のように鋭く獲物を睨みつけていた。優希も、何の表情も浮かべずにただ少女の瞳を受け止めていた。
二人の間に流れる痛々しい空気に、智里もイルバードも声を出せず、ただ見ていることしか出来なかった。
『さあ、レディー・アン。自己紹介なさい』
沈んだ空気にポニーの声がひどく浮いて聞こえた。それでも、澱んだ空気が少し取り除かれたような気がした。
口を開かないアンに痺れを切らしたのか、ポニーは握っている糸を少し引いた。アンは最後まで視線を優希から外さずに、ポニーへと顔を向けた。新緑の瞳が上を向く。
『睨めっこは終わった？なら自己紹介をしてちょうだい。あなたのことを知らない人ばかりでしょう』
アンの視線が外れたとき、優希が悲しげな表情を堪えているのが目に入った。けれどそれは一瞬のことで、すぐに無表情に戻ってしまった。智里はそんな弟を見ていられなくてそっと目を逸らした。
微笑むポニーに舌打ちをするとアンは口を開いた。
『アンジェ・シーリー。マリアーヌ・シーリーの妹よ』

名乗った後、アンは糸を解くように言った。
『痛いのよ。もういいでしょ、ポニー』

「ポニー！」
アンに被せてイルバードが声を上げる。あまりにも早い展開に智里はただ人の顔を見回すだけだ。
アンを見つめながらポニーは微笑んだ。
『大丈夫よ、お兄様。レディーは野蛮なことをしないものよ』
「馬鹿なことをいわないでください！その少女はユウキを狙っていたのでしょう！？それなら、そのまま然るべきところへ連行するのが常識です！お前はユウキの護衛なのですよ！」
ポニーは兄を見ると呆れたように笑った。
『その護衛が大丈夫と言っているのよ。ねえユウキ、手を離すけどいいわよね』
全員の視線が優希へ集まる。優希はしばらく黙った後、静かに頷いた。
『おれはいいよ』
「ユウキ！」
叫ぶイルバードを無視して、ポニーは光の糸を握っていた手を開いた。糸がサラサラと砂のように崩れていく。崩れた光は床に落ちる前に小さくなって消えた。
綺麗だと、智里は思った。魔術師が側にいるにも関わらず、智里は魔術というものを見たことがなかった。それというのもイルバードが使う魔術は智里が周りの状況をみてやっと把握できるものばかりで、実際に形として見たことがなかったからだ。
ずっとこの光を見ていたいと思ったのだが、それは5秒にも満たない間に消えてしまった。
アンは服についた埃を払いながら、それ以上に泥がついているのだが、その場で立ち上がった。優希へ視線を向けるが、それは先とは違って穏やかなものだった。
『残念ね』
手首を回しながらアンは言った。
『悪魔の栄光も地に落ちたわね。あの時のあなたなら、私なんてあ

の場で殺されていたのに』
「悪魔…？」
それは誰のことかと問おうとして、気付いた。どこの世界にもあることだ。
優希の悲痛に歪んだ顔が見えた。イルバードが言いにくそうに口を開く。
「チサト、それは…」
『ウェルテスの悪魔。古代兵器を操る者。その前に立ちふさがるローゼンスの兵士たちを蹴散らし、王宮を血塗れにした。ローゼンスじゃもっぱら人ではないって話よ。ああそう、そっちでは英雄と呼ばれていたのだったわね』
善と悪は裏表と言うことだ。立場を変えれば善は悪へと入れ代わる。
実際に、イルバードがそうだ。イルバードが優希を召喚し、入れ代わったのはウェルテスにとって良いことだが、智里にとっては悪い出来事だった。
身に覚えがあることだから、仕方がないことだと理解をしたつもりだった。だが、アンの言葉が引っかかる。
血塗れ…？
優希へ視線を向けると、ちょうど優希もこちらを見ていた。視線が合うと口をぎゅっと噤んで目を逸らせた。思わず声をかけようとすると、それより先にアンが口を開いた。視線が集まる。
『ねえ召喚者さん、そうでしょう？』
アンがイルバードへ同意を求める。空色の瞳は大きく開いた。
「なぜ、それを知っているんですか」
優希が召喚されたことは広まっているかもしれないが、イルバードが召喚をし、この世界に来ていることまでは広まるはずがない。イルバードは元参謀ではあるが、今は軍も辞め、ただの貴族と成り果てた身だ。
『あら、あなたたちの国が教えてくれたのよ。わざわざ姉の遺品を

届けてくれたじゃない。わざわざ血の封印までして、私以外誰にも開けられないようにしてあったわ』
アンは自分を抱きしめて、笑った。
『姉の日記が入ってた。あの時知ったこと、感じたこと、全てが事細かに書いてあった。確かに姉はスパイだったけれど、あなたたちの城で過ごしているうちに、あなたたちのお姫様を大切に思ってた。あなたのこと、すごく大切に思ってた』
優希へ向けた目は悲しみに濡れていた。アンは優希をしばらく見た後、感情を押さえつけるように目を閉じて細く息を吐いた。
『何度も名前が書いてあった。くだらないことでも全部書いてあった。話しかけてくれた、とかね』
ほんと馬鹿な姉だわ。アンは目を閉じたままくすりと笑った。
『あ…』
優希が何かを言いかけて、言葉を探しきれずに口を閉じた。それを見てポニーが呆れた。
『あたしの周りの男は本当にヘタレで嫌になるわね。お父様を見習いなさいよ。言わなきゃ伝わらないことなんていくらでもあるのよ。遅いことなんて何一つない。言ったもの勝ち。タイミングなんて作ればいいのよ』
テーブルに座り足を組んで、ポニーは苛立ちを隠さず大きく息を吐く。優希は頭を掻いている。イルバードを横目で見ると、不貞腐れたように手で口元を隠していた。

『マリはさ、きみのこと誰よりも大切に思っていたよ。いつでもきみのこと話してた』
ちらりと智里を見て、覚悟を決めたように優希は話し出した。花飾りを一緒に作ったことや、お菓子の取り合いで喧嘩したこと、きみが近所の男の子にいじめられたとき仕返しに行ったこと、それで怪我をして帰ってきたマリをみてきみが泣いたこと。
『残してきたきみを、マリはずっと心配していた。だから、スパイ

を止めたくても止められなかった』
困ったように笑って優希は言う。
『おれがさ、むりやり連れて来ようかって言ったら、自分がちゃんと連れてくるんだって怒られた。…あんなことになっちゃったけどさ』
きみがおれを恨むの、よくわかるよ。優希が窓に寄りかかって腕を組んだ。
『あの血の封印は、マリがしたものなんだ。きみ以外に見られないように。きみに渡せるように』
届けるようお願いしたのはおれなんだ。
日が沈んで、黄昏ている空を眺めて優希は呟いた。
アンは下を向いて聞いている。そのまま少し笑った。
『殺してくれればよかったのに』
カツと床を鳴らしてポニーがアンの絡まった髪を撫でる。揺れる髪に紛れて光る雫が落ちた。

画面の向こう側　3

『それじゃあ、また後で』
少し休憩しようということになって通信を切った。たくさん話をしていろいろな事を知って、みんな頭の整理が必要だ。
時計を見ればそろそろ7時。窓の外も暗くなっている。夕食にもちょうどいい。
優希から目を離すのが心配だったが、切る間際にそう言った優希の顔がなんだかすっきりしていた。それを見て智里は“心配”に無理矢理蓋をした。
そのうち母が夕飯を呼びに来るだろう。それなのに智里が顔を曇らせていたら、母は何があったのかと不審に思う。母が来るまでに、“普通の”智里に戻らなくてはいけない。
普通でいること。周りの人に気取らせないこと。それが今智里が為すべきことだ。
「疲れましたか」
通信機の蓋を閉めたイルバードが智里に問いかける。ため息をついたのを気付かれたようだ。
ばれたなら仕方がないと苦笑して、智里は箪笥に寄りかかって膝を立てた。
「やっぱり、どうしても話についていけなくて。ひとり置いてけぼりを食らった気分です」
どうにかすると下がりそうになる視線を上げ、智里は笑顔を作る。
「チサトはよくついてきてくれていますよ。それでも足りないならわたしのサポートが悪いのです」
あなたが自分を責めることはないんです。そう言うイルバードの真面目な声が聞こえる。いつもならすんなりと智里の中に入ってく

るその声も、ただ耳をすり抜けていく。
私は本当に何も知らない。心の中で呟いた。
ただイルバードの話を聞いて、理解したような気持ちでいた。ウェルテスという国のこと、優希がどのようにしてそれを独立へ導いたのか。紛争の被害やその後の復興のこと。
だが、自分がそこに存在しないということは、その世界をただの情報として認識していただけだと思い知らされた。
そこには確実に、流れた血があるのに。
『ローゼンスの兵士たちを蹴散らし、王宮を血塗れにした』
アンはそう言った。つまり、敵味方問わずたくさんの血が流れたということ。それは幾重もの命が散ったということ。
その原因は、優希だと。
アンの言葉が耳から離れない。目を閉じれば、真っ赤に広がる血の海に人が倒れている映像が頭を過ぎる。
だがそれも想像でしかなく、まるで古い映画を見ているように、どこか希薄に感じる。
智里がどんなに望もうとも、ウェルテスや英雄・優希の物語は、決して智里の現実になりはしないのだ。
「チサト」
智里の様子に気付いたのかイルバードが智里の名を呼ぶ。ハッとドアを見て口を閉じた。すぐに階段を登る足音が聞こえてきた。それと共にご飯よと明るい母の声がする。
智里は考えていた全てを心にしまった。私は“普通”だ。
「はーい、今行く！」
「チサト」
廊下に出ると空気が変わった。イルバードの張った結界から抜け出たからだ。階段に足をかけ、呼びかける人に顔を向けた。
「行きましょ、イルバードさん」
眉を寄せるイルバードに笑顔を返し、返事を聞かずに段を降りた。

「おいしそう！あれ、お父さんは？」
椅子に手を置いて、智里は尋ねた。今日の夕飯はポークソテーだ。茶碗にご飯をよそいながら、母が残業だと答える。
「最近また忙しいみたいよー。ほら、運んで」
ふうんと相槌を打ちながら、受け取った茶碗をイルバードの席へ運ぶ。自分の分も受け取って席に着いた。
母も茶碗を持ってきて席に着いた。いただきますの掛け声と共に箸を持った。
テレビからはにぎやかな声が聞こえてくる。タレントがクイズ問題を答えている。
「あら、また間違った。最近この人もダメねー」
お母さんこれわかるわよと、母は箸を動かしながらも器用に喋り続ける。それに智里とイルバードが答えたり頷いたりする。
「智里、あんたこの問題わかる？」
「かわせみ」
口の中の肉を飲み込んで答えた。本当かと聞き返してくるので、嘘だと言ってやった。ＣＭが明けて司会者が正解を発表する。
「当ってるじゃない。全くこの子ったらねえ、イルさん」
澄ました顔でスープを飲んでいる智里を母は睨み、イルバードに同意を求める。話を振られた人は金色をさらりと揺らして軽く笑った。腐っても書店員ねと憎まれ口を利く母を睨み返して、ご飯を片付けることに専念した。
付け合せのジャガイモを口に含む。ここに父が加われば、ここ何週間で馴染みとなった食卓の風景だ。いつの間にか馴染んでしまった。
その前の風景を思い出してふと笑った。優希がいるときはもっとうるさかった。母の相手は専ら優希がして、それを更に智里や父に振るもんだから、いつでも食卓が賑やかだった。
優希は今頃どんな食事をしてるのかしら。顔では笑顔を作りなが

ら、思った。

食べ終えた食器を流しに置いてくると、母はいそいそとテレビの前に移った。滅多なことがなければ、母はこれから１０時のドラマが終わるまでテレビの前を離れない。

自分の部屋から財布と携帯を取ってきて、母に声をかけた。

「私ちょっと出掛けてくるから」

「あら、どこ行くの」

クッションを抱きかかえ、身体を捻って母が聞く。イルバードがこちらを向くのがわかったが、気付かない振りをして車の鍵を取った。

「図書館に行ってくる」

「じゃあ帰りにアイス買ってきてね」

「はいはい」

いつものやつねと承諾して、玄関へ向かった。その後をイルバードがついてくる。靴を履いた智里を、いつもより高い位置からイルバードが見下ろした。

「わたしも一緒に行ってもいいですか」

空色の瞳には睫が陰を落としている。智里の肌や玄関の木の色がうっすらと瞳に散らばっていて、夜空のようだった。

首を傾げると、イルバードは少し困った顔をする。もっと困らせてやろうか。いやそれは大人げないだろう。コンマ１秒で考えが錯綜する。

大人げなくてもいいか。そう結論付け、イルバードに答えずに外へ出た。玄関を開けると、むっとする空気の中にほんの少し冷えた風がそよぐ。季節は徐々に秋へと移り変わろうとしている。

「チサト、ちょっと待ってください」

後ろから慌ててサンダルを履いて飛び出してくる音が聞こえる。お母さん鍵をお願いしますと叫んでいる。

初めて会ったときにはあんなに強引だったのに、最近やけに控えめになった。智里はそれにほんの少しの苛立ちを感じる。なぜ苛々するのか、その理由はわからないが。

車の中はまだ夏のままだった。湿気た空気にシートの革の匂いが立つ。エンジンを掛けてエアコンを強風にした。窓を叩く音がする。すぐ横に情けない顔のイルバードが立っていた。まるで迷子になった子供のようで、笑いそうになる。それを必死で抑えて窓を開けた。

口を開いたイルバードを遮って智里は言った。

「助手席、空いてますよ」

喜びに晴れた２８歳の童顔を見て、結局私も甘いなと智里は苦笑した。

画面の向こう側　4

夜道を走らせる。
ネオンや電灯が途切れなく後ろへ駆け抜けていく。家路に急ぐ人や犬の散歩、ランニングに励む人々をオレンジや青白い灯りが照らしている。この光景が智里は好きだ。
まるで物語やテレビドラマのように、人々の生活の一瞬を客観的に眺める。幸せそうなカップル、疲れたサラリーマン、コンビニ帰りの若い女性。そんなどこにでもある一瞬を、羨ましく思ったり、同情したり、幸せに思ったりする。
街の灯りが無機質に人や道や建物を照らし出す。昼を思わせる明るい光、家の窓から零れる温かい光、タバコの熱い光、携帯電話の薄い光。それらを客観的に眺めることで、人の営みの温かさだったり理不尽さだったり、そういうものを再確認しているのかもしれない。
ラジオもCDも付けていなかったので、車内は沈黙に包まれていた。イルバードが居心地悪そうに身体を動かす。
「図書館にはよく行かれるんですか」
智里の運転をちらりと見ながらイルバードが話しかけてきた。智里は振り向かずに答える。
「そうですね。本を借りるのはもちろんですけど、考え事をしたいときとか、一人になりたいときとかによく行きます。9時まで開いているので、仕事のある日も行ったりしますよ」
そうですかとイルバードは呟いた。また沈黙が訪れた。
信号が赤に変わり、智里は車を止める。
小さく、わからないくらい息を吐いた後、智里は呟いた。聞こえていないなら、それでいい。

「昔から本が好きなんです。本そのものも好きですけど、物語が好きなんですよね。その世界っていうんでしょうか、自分じゃない自分になれるような気がして。子供っぽいですけど」
信号から目を離さずに笑う。イルバードの髪がさらりと揺れた。恐らく首を振ったのだろう。
「物語の主人公と一緒にいろんな感情や、問題をわかったつもりでいました。でも、それだけじゃだめなんですね。もっと周りに目を向けなくちゃいけない」
歩行者が智里たちの前を横切っていく。女子高生たちが何人か楽しそうに喋っている。
「私、イルバードさんの話を聞いてきて、大体のことを理解してきたつもりでいたんです。でも、頭で理解していても、心で感じられなければ、それはただの知識なんですよね」
そして知識に感情は付随しない。ただ彼らを憐れむことしかできない。智里はどうやっても部外者でしかいられない。
優希の問題だけでなく、ウェルテスやラキアに好意を感じている今は、傍観者だけでいなければならないことが更に悔しい。
それをイルバードに言うつもりはなかった。ただの言い訳にしかならないことをわかっていた。
もうこれ以上は何も言うまいと口を噤んだ。
「チサト」
さっきからこの人は名前しか呼んでいないなと頭の隅で笑った。
後ろからクラクションが鳴った。前を見ると青信号になっている。慌ててアクセルを踏んで車を発進させた。勢いのままシートに体が押し付けられ息が詰まる。
「ごめんなさい」
急発進をしたことに謝って、ハンドルを右に切った。

図書館というものは静かで落ち着く場所だ。少なくとも智里にと

ってはそうだ。本という存在に囲まれた空間は、幼い頃から智里にとって幸せで大切な場所だった。
字を読めるようになってから母に連れられて図書館に来たときは、まるで宝石箱の中にいるように輝いて見えた。あの感動はもう薄れてしまったけれど、それでも田舎の家に行ったときのような落ち着いた気分になる。
夜の8時を過ぎて学生ばかりが目立つ図書館の中、共有スペースの端の一角で、智里とイルバードは向かい合っていた。
重苦しい雰囲気が漂っている。今はそれを振り払う気もせず、智里はただ黙り込んでいた。
その重い空気を感じ取ってか、同じテーブルに着いていた男子高校生は後から来た二人を何度か見て、居心地悪そうに帰っていった。申し訳ないなと思うけれど、今は許してねと自分勝手に心の中でお願いした。
急発進をしてから今まで、会話らしい会話をしていない。イルバードも名前を呼んだきり、何も発しなかった。
この人は何のためについてきたんだろう。窓ガラスに映った金色を盗み見る。
私は慰めて欲しいのだろうか。自分から拒否したのに？
放っておいて欲しいのだろうか。ついてくることを許可したのに？
自分の気持ちがわからなくて苛々する。八つ当たりしてしまいそうになる。それは嫌だからと、言葉を飲み込んだ胃がムカムカする。
焦点が窓ガラスに反射している自分の顔に合った。暗く澱んでいる。そのくせ明かりに照らされて瞳だけ光っている。なんてひどい顔だろう。まるで死に損ないの獣だ。痛くて痛くて楽になりたいのに、それでも生きている獣だ。
全てを知りたいと願うのに、全て知ることはできないと諦めている。
自分は部外者にしかなれないと決めて、知らないことに言い訳をしている。

知りたくないことを知ってしまったとき、知ったことを投げ出して耳を塞いでしまいたかった。
それでも獣が生きたいと渇望するように、智里も知ることを望んでいる。優希のためだけでなく、自分のために、あの世界に近づくことを望んでいるのだ。
瞬きをした自分の目に写る光が、ほんの少し色を変えた気がした。
「イルバードさん」
前に座っている人の名前を呼びながら顔を上げたとき、周りの音が聞こえないことに気がついた。イルバードが結界を張ってくれたのだ。ずっと考え込んでいる智里を気遣ってくれたのだろう。
名を呼ばれた魔術師は微笑んでいながら瞳を不安げに揺らしている。きっと、ずっと智里が顔を上げるのを待っていたのだ。心配でも声をかけず、周りの音が邪魔をしないように遮断して、智里が顔を上げたとき安心できるようにただ笑顔を浮かべて待っていたのだ。
その心遣いに胸の奥がふわりと温かくなった。
「落ち着きましたか」
問われて頷いた。すると心配の色を払拭して、イルバードが嬉しそうに微笑む。
「やっと笑いましたね」
どうやら気付いていなかったが笑えていたようだ。それに気付いて目を伏せた。
胸の中の温かさが心地よい。人の気持ちはこんなにも温かいものだと思い出した。
今日の智里はそれすらも受け取れないほど落ち込み、焦っていたのだ。そんな自分に苦笑すらでない。社会に出てもう何年も経つのに、まだまだだなと思う。
「やっぱりチサトは笑っているほうがいいと思います」
少しも照れずイルバードは言う。その表情を見て、智里はイルバードがなぜついてきたのかわかった気がした。
たぶんだけれどと、智里は思う。この人は私を本気で心配してく

れていた。ウェルテスや、ラキア、優希たちのことと同じくらいに。
もしかしたら、それ以上に。
「ずっと難しい顔をしていましたね。わたしもまだ話しきれてないことが…チサト？」
惚けていた顔をしていたのだろう、イルバードは怪訝な顔をして名前を呼んだ。慌てて首を振り、愛想笑いを浮かべる。
イルバードが不思議な顔をしたとき、気の抜けた音が響いた。優希からの着信だ。
互いに目を合わせて頷いた。

画面の向こう側　5

『明日にはウェルテスに向けて発つよ』
『とは言っても、あたしの魔術ですぐなんだけどね』
顔色が良くなった優希が笑うと、後ろから素早くツッコミが入った。優希はその通りだけどさと不貞腐れたように頭を掻く。
「戻ったら犯人探しなのよね？」
「そうなんだよ…」
智里が聞くと、弟はため息をついた。

食事がてら話をしたところ、アンがしたことは優希に矢を射ったことだけだった。
姉のマリアの話を少し交わした後、アンの雰囲気は少し落ち着いた。そしてぽつりと話を始めたのだ。
町の噂で優希がまた戻ってきたと知ったこと。
どうしても復讐がしたくてウェルテスの王宮近くまで行ったこと。
警備がやけに手薄だったように感じたこと。
警備の交代の隙をついて王宮へ忍び込んだこと。
そこで迷って、あの部屋へ入ったこと。
誰かが来た気配がして隠れて弓を構えたこと。
そして、優希が来た。

『目の前が真っ赤になったわ。気がついたら弓を引いていた手を離してた』
椅子に座ったアンは、傷の手当をされて綺麗な服に着替えていた。

ポニーのお古だというその服は丈が余っていた。
見詰めている智里に気がつくと、小さく笑った。
『覚悟はしていたの。姉を殺した人を私が殺してやるんだって』
自分の意志より早く手が動いちゃったけど。そうして少し口を噤むと、言った。
『失敗して、私は逃げて、ポニーに会った』
みんなの視線がグラスを傾けているポニーに向く。それを受けて、放蕩魔術師は苦笑した。傍らのビンから鈍色に光る液体を空になったグラスへ注ぐ。
『どっかの誰かさんが口座を凍結させたから、お父様にお小遣いをもらおうかと思って城の方まで足を伸ばしたのよ。そこで、必死の形相で駆けてくるんだもの。助けてあげようって思うじゃない、普通なら』
「いい年をして、お小遣いとか恥ずかしくないんですか」
半目で妹を睨むイルバードに苦笑して、智里は先を促した。
『そのあとって言われても、彼女をローゼンスまで送って、ウェルテスに戻ってきたわ。そしたらお父様にも手伝えなんて言われちゃって散々だったわよ。まあおかげで1割は増やせたけど』
机についたイルバードの手がわなわなと震えている。それを抑えようと智里が手を伸ばすと、イルバードはそれに気付いて引きつったように笑うと自分の手を引いた。
『それでさ、おれと別れてからアンに会いに行ったんだと。姉ちゃん聞いてる？』
「ああ、うん」
気がつけば眉が寄っていた。それを伸ばして笑うと、優希は微妙な顔をイルバードに向けた。
『イルも、聞いてんのかよ』
「もちろん、聞いてますよ。それでうちの妹は何をしにアンに会いにいったんですか」
『もちろん、お礼をもらいによお兄様。それが役に立ったんだから

いいじゃない』
重たいため息をついて、イルバードは頭を抱えた。ポニーは楽しそうにグラスを空にする。
智里はそれに小さく笑うと、優希の視線に気がついて顔を上げた。なぜか心配そうだ。
「なによ」
問うと、弟は嫌そうな顔でなんでもないと首を振った。

アンさんが皇女さまの件に関わっていないということは。
「他には誰がいるのかしら」
小さく呟いたのだが、それにアンが気付いた。
『たくさんいるでしょう。ローゼンスにだってまだまだ皇女を逆恨みしているやつは山ほどいる』
「それはそうですが、王宮に入れる人間は限られています」
アンの言葉にイルバードが反論するが、鼻で笑われた。
『警備が手薄だったと言ったでしょう。私でさえ入れたんだから、他にも入れる人間はいるはず』
アンの言葉にイルバード何もいえなくなった。唇をぐっと噛む。
『早くラキアに伝えた方が良さそうだな。あいつまだそこまで手が回っていないんだろ』
『まあ、お父様がいるからラキアの周りは心配したくないけどね。ルークもまだ動けないんでしょう』
焦る優希に、ポニーはため息をついた。
その様子を見て、智里はふと呟いた。
「一度目の…」
「チサト？」
みんなの目が智里に集まる。それに驚いて、智里は慌てた。たいしたことじゃないんだけどと前置きをして恐る恐る続けた。
「一度目の毒、どうして軽い神経毒だったのかなと思って。二度目

は即死性のものだったじゃない」
無意識に髪の毛を梳いて、笑った。
『一度目は試しで、とか？』
「それだとその後こちらは警戒してしまうでしょう、逆効果です」
優希の言葉にイルバードは顎に手をやって考える。
『最初は殺す気がなかったけど、後からやっぱり殺したくなったんじゃない？』
『殺す気がなかったか…』
グラスを回してポニーが言う。アンはどこか遠くを見ていた。
「ちょっと気になっただけなの。私はあんまりそっちの事情を知らないから、ちょっと言っただけで…聞き流しておいてください」
みんなが意外と食いついてきて智里は焦った。
カタリと音を立ててアンが椅子から立ち上がった。視線がそれに向かう。
『あ、私…』
言い淀んで、アンは口を閉ざした。なんでもないと首を振って椅子に座り直す。
『どうした？なんかあるのか？』
優希が促すが、アンはただ首を振っただけだった。
ため息をついてポニーが口を開く。
『ねえ、ユウキ。今更なんだけど、あんたのお姉様よね、彼女』
グラスを智里に振ると、優希がはっとした。
『ああ、悪い。紹介がまだだったんだよな。なんだかいろいろあって忘れてたよ』
照れ笑いをして智里に背を向けた。全く、と呟いてポニーはグラスを傾けた。
『ポニー、アン。おれの姉の智里だ』
優希の後ろ頭が消え、画面が揺れて、瓶を持ったポニーとアンが大きく映った。慌てて椅子から立ち上がると、頭を下げた。
「智里です。ポニーさんには、弟の為に力を貸していただいて、あ

りがとうございます」
『いいわよ、ポニーで。こちらこそ、甲斐性もない兄が世話になって悪いわね。思う存分こき使ってやって』
「ポニー！もう少しちゃんと自己紹介できないんですか！妹がすみません、チサト」
妹は兄の言葉を聞き流しながら、ビンの残りをグラスに注いでいた。その横顔には小さく笑みが浮かんでいる。
その光景を微笑ましく思いながら、アンへ向いた。
「アンさん、智里といいます。お姉さんのことは、残念なことです」
少女は光に照らされて赤みを帯びた新緑の目を智里に向けた。
『私は、名乗ったからいいわよね。もういいのよ、姉のことは』
そう呟いた顔が落ち着いていたので、知らぬ間に強張っていた肩を緩めた。くすりと笑ってアンは付け足した。
『あなたは、姉に少し似てるわ』
少し驚いて、智里は微笑んだ。
眉を寄せて、アンはため息をついた。恨めしそうにポニーを見る。睨まれた方は知らん顔でグラスを傾けている。
『ポニーには敵わないか』
悔しそうに笑って、アンはさっきの続きだけどと話し始めた。
『さっき、言おうとしたことだけど、ウェルテスの城下町で不審な侍女を見たわ。文化が違うから、不審に見えただけなのかも知れないけれど』
ウェルテスは買出しも侍女がするものなの？アンはそう問いかけた。
優希とイルバードは重いため息をついて、顔をしかめた。
『ウェルテスに帰ったらまずはそいつを見つけるか』
「お願いします、ユウキ。あなたが探している間に父に話をつけておきましょう」
優希は頷いて、アンに振り向いた。
『お前も手伝ってくれるか』

アンは驚いて、顔をしかめた。ポニーはその奥で空のビンを振っている。その顔は楽しそうだ。

肺から大きくため息をついて、アンは椅子から床へ崩れた。床に手をついて頭を垂れた。

『仰せのままに』

画面の向こう側　6

あのあと、優希はそういうつもりで言ったんじゃないとか姉ちゃん助けてくれよとかひとしきり騒いで通信を切った。
画面が消え、明かりがなくなると、一瞬にして闇が訪れた。
「あれ？」
いくら結界の中にいるとはいえ、灯りまで遮断することはない。イルバードの顔も見えなかった。
「今何時・・・？」
携帯電話を開くとぼんやりと光る画面には短針が９の上、長針が６の左をそれぞれ指していた。
どうやら話しに熱中しすぎて閉館したことに気付かなかったらしい。
思わず頭を抱える。薄青い光の中、イルバードがぼんやりと見えた。
「チサト？」
「図書館、閉まっちゃったみたいです」
「それは、どうしましょう」
どうしましょうと智里も心の中で呟いた。
閉館してからまだ３０分しか経っていない。もしかしたらビルの管理の人がまだいるかもしれない。
辺りは真っ暗で、暗闇に目が慣れれば少しは違うのかも知れないが、足元もおぼつかない。それでもどうにか扉に辿り着いて、叩いてみよう。
そう思って席を立つと、急に腕を取られた。態勢を崩してテーブルへと手をつく。
「どこに行くんですか？」

「とりあえず出口に向かってみようかと」
携帯は智里の足元を照らしている。イルバードの顔が見えない。感じるのは、腕に触れる熱だ。
「あの」
「それなら一緒に行きましょう」
腕の熱がするりと下りる。智里の手が机から浮き、イルバードのそれに捕らわれた。
ゆっくりと引っ張られる。
「足元、気をつけてくださいね」
落ち着いたイルバードの声に頷いたが、それでは伝わらないと思い直し小さく、はいと呟いた。
智里が少しでも椅子に当たれば、イルバードの引く手は更に速度を落とす。
テーブルの端まで来ると、腕を伸ばしていた分の距離がなくなった。
暗闇に慣れてきた目に、ほんの少し輪郭が見えてきた。見上げれば、幽かに金色が揺れた。その口元が微笑んでいるような気がして智里は顔を逸らした。
「行きましょう」
ほんの少し、握った手に力が込められた。イルバードに合わせて智里も足を出した。

カタリと音がする。イルバードが椅子を辿っているのだろう。
本当に、この人がわからない。智里の中にはイルバードという人が疑問符のままだ。
やけに絡んでくると思えば、次にはそっけなくなる。
やたらと触れてきたり、触れなくなったり、また触れたり。
今は緊急事態だから、と心の中で声がした。頭の中では本当にそうかしらと反論する。

だいぶ暗闇にも慣れてきた。イルバードもそうだろう。もう手を離しても、イルバードのシャツの輪郭についていける。
それなのに、ゆるりと握られた手は外されることがなく智里を導いている。
それなのに、ゆるりと握られた手を外すことなくイルバードに道を任せている。
放して欲しいと思う。
外せるはずの手が自分の手じゃないみたいだ。
顔が熱い。冷房が切れているのかしら。
天井へ顔を上げると、イルバードの頭の向こうに非常口の緑色がぼんやりと光っていた。

「来ませんねえ」
「来ませんね…」
非常灯の下、緑の光に照らされた智里はガラスの扉を背にして座り込んでいた。
たどり着いた出口は当たり前だが施錠されており、がたがたと揺らしても見回りの警備員が近寄ってくる気配もない。
「明日、早番なのに」
携帯の画面には、今日の終わりまで残り2時間を切った文字盤が映っている。それを開けたり閉めたりして、智里は暇をつぶしていた。
出口は一つしかないので、ここから出る以外には方法がないのだ。巡回がこなければ、明日の朝、誰かが出勤してくるのをここで待つしかないのか。
そんな智里をイルバードは見下ろして、困ったように笑った。困ってるのはこっちよと心の中で悪態をつき、智里は情けない顔をした。
少し困った顔のまま何か考え込んでいたイルバードは、智里の前

にしゃがみこむとユウキには内緒ですよと人差し指を立てた。
「それってどういう？」
「ここから出て、帰りましょう」
手を差し伸べるイルバードに、智里はさらに首を傾げる。イルバードはそれにまた困ったように笑って、智里の手を取って立たせる。
一瞬イルバードが智里を見詰める。その手をぐっと引き寄せられた。たたらを踏む。
とっさに携帯を握ったままの手をイルバードの胸についた。指の先に大きな白いシャツが触れる。
放してと言えぬ間にイルバードが智里の肩に触れた。角張った手の感触が薄い布を通り越して伝わる。
頭が真っ白になった。
「行きますよ」
え、と声を上げるまもなく視界がぶれる。まるで水の中に沈んだように目の前が揺れる。
イルバードの体温が智里と同化したように感じた。目を開けていられなくて固く瞑る。
床がぐにゃりと波打った。
イルバードの手に力が入る。悲鳴を上げそうになった智里はその力強さに身体を任せた。
手に握っている携帯の感触を失いかけて、慌てて握り直した。その感触こそが現実だと、縋り付くように、強く強く握り締めた。

青々とした草のにおいがする。少し冷えた空気が頬を撫でる。
さらりと何かが頬にすれた。くすぐったくて起きた。
目を開けたのに、そこは真っ暗だった。不思議に思って唯一隙間のある上を見ればすぐそこに見慣れた車のナンバーが縦になっている。その前、智里のすぐ上にイルバードの顔があった。
「…ええと」

悲鳴を飲み込んだことは自分を評価しよう。
智里の上にあるイルバードの顔はこんな暗闇の中なのに、やけに白く見える。そこに長い金髪がかかって、まるで物語の中の薄幸の王子だ。
そこまで考えて、はっと気付いた。
「イルバードさん？」
小さく名前を呼べば、魔術師は薄く目を開いた。
「…チサト」
唇だけで言うと、目が覚めたのか少し身体を離してイルバードは智里の無事を確認した。身体を離したことで、二人の隙間に風が流れ込んだ。金色が落ちてくる。
「よかった」
微笑んだイルバードは自分と智里の身体を起こすと、大きく息をついた。
そのリラックスした様子に、智里は大きく開いていた目を更に丸くした。様子というよりは、その恰好に。
「イルバードさん…その髪」
「はい？」
笑顔のまま智里の指差す方を見ると、イルバードは顔を引きつらせた。
イルバードの髪は背中に届くくらいに伸び、その身を丈の長い黒い服で身を包んでいた。
明らかにまずい顔をしているイルバードに、智里は顔を元に戻せない。
「これが、ウェルテスのわたしなんです。驚かせてすみません」
困った顔をして笑うイルバードはそのまま小さく何かを呟くと、瞬きの間に元に戻った。いや、仮の姿に変身したと言うべきか。
髪を短く、白い涼しげなTシャツに身を包んだいつものイルバードだ。智里はそっと眉を寄せてその姿を見詰めた。
「図書館から抜け出したのも、魔術なんです。びっくりしましたよ

ね」
後ろ頭を掻くと、そこから草切れが一片落ちた。風に乗って流されていく。
智里はのろのろと手を上げ、目を隠した。
「びっくりしました。魔術って、あんな…」
そこまで言って口を閉じた。言葉にできない。
浮遊感。落下感。波に揺られたようにまどろみ。そして胃のそこから持ち上げられような気持ち悪さ。
吐き気はないが、まだどこか気持ち悪さが残っている。あのときイルバードに抱きしめてもらっていなければ、今も気を失ったままだったかもしれない。
「大丈夫ですか、チサト」
手を下ろすと、イルバードが覗き込んでいる。顔色が悪いかもしれないなと思いながら、大丈夫と笑った。そうですかと信用していない顔でイルバードも微笑んだ。
イルバードは立ち上がって、智里へ手を差し出した。その手へ重ねると、冷やりとしていた。さっきの温かさを思い出して、その差にぞくりとした。
「とりあえず、帰りましょう。だいぶ遅くなってしまいました」
「イルバードさんも気を失ってたんですもんね。魔術っていつもあんな感じなんですか」
服についた草切れを叩き落して、いつの間にか落としていた携帯を拾い上げる。
「いえ、こちらで使うのはまた感覚が少し違いますね。魔力の質が違うのかと思いますが」
「へえ」
そういうものなのかなと考えながら携帯を開いた。電源が切れているようで、画面が真っ暗だ。いつ切ったかなと眉を寄せながら電源ボタンを押す。開いている手で車のキーを開け、乗り込んだ。
「おかしいな、携帯の電池切れたのかしら」

隣でイルバードが居心地の悪そうな声を出した。訝しがりながらそちらを見ると、罰の悪そうな顔で頬を掻いていた。
「もしかしたら、なんですけど。魔力に触れて、携帯が壊れたかもしれません」
相性悪いんですよね、魔術と。イルバードは困ったように笑う。
智里は預金通帳を浮かべて泣きそうになりながら、車を発進させた。

隣に座る人に時折意識を寄せる。
目を閉じて、シートに身体を預けている。
倒れていたとき、本当に透けてしまうんじゃないかと思った。
長い髪が風に流されて綺麗だと思った。
こちらの文化からは遠く離れた服だった。
あんな魔術を使うんだと思った。
本当に私と違う世界の人なんだと思った。
あんなに温かい手があんなに冷たくなっていた。
フロントガラスが滲む。ワイパーを動かしそうになって、慌ててウィンカーをつけた。
進路変更して、母のお使いを済ませよう。そしてイルバードに温かい缶コーヒーでも買おう。

心臓がただ痛い。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1317o/

物語の向こう側

2011年3月9日21時10分発行